



存する景観」は、銀生産に関わった人々が長く生活してきた集落などの「継続する景観」の地域を含んでおり、歴史的土地利用のあり方を示している。

## 遺産価値総論

「銀鉱山跡と鉱山街」、「街道」、「港と港街」の3つの分野にわたる14の構成資産からなる。「銀鉱山跡と鉱山街」は、16世紀から20世紀にかけて、銀鉱石の採掘から精錬までを行っていた銀山柵内や清水谷精錬所跡などの鉱山跡、600もの小規模な手掘りの坑道「間歩」などを中心に、銀の生産やこれに関連する仕事に携わっていた人々が暮らした鉱山街や、これらを軍事的に守備していた周囲の石見城跡などの山城跡で構成されている。「街道」は、銀鉱山と港との間に整備され、銀鉱石や銀の搬出をはじめ、さまざまな物資の輸送を担っていた



間歩

石見銀山街道など2本の運搬路。「港と港街」は、銀鉱石や銀の積み出しの他、銀山運営や居住区で生活に必要な物資を搬入していた鞆ヶ浦港と沖泊港の2つの港とその関連施設、そして港での仕事に関わる人々が暮らした温泉津などの温泉街である。銀鉱山が稼働していた当時、銀の生産から搬出までの全過程を担っていたこうした施設の遺構や街並は、鉱山開発における社会の構造や基盤といった、かつてこの地域で隆盛を誇った銀産業の全体像を示す重要な証拠となっている。

これら遺構の周囲には、19世紀まで銀生産や住民たちの生活で使用された薪炭材の供給源であった森林をはじめ、豊かな自然環境も残されている。鉱山の運営、そして人々の暮らしの様子を物語る景観が、広い範囲かつ良好な状態で保存されており、文化的景観が認められた。

## 歴史

石見銀山は1526年に発見された後、当時、日本最大の貿易港であった博多の豪商である神屋寿楨によって開発が進められた。



□ 石見銀山遺跡の登録範囲

真視県

文化的景観



# 石見銀山遺跡とその文化的景観

Iwami Ginzan Silver Mine and its Cultural Landscape

文化遺産

登録年 2007年／2010年範囲変更 登録基準 (ii)(iii)(v)



## 登録基準の具体的な内容

### ●登録基準(ii)：

16～17世紀初頭の大航海時代、石見銀山における銀の生産は、アジア及びヨーロッパの貿易国と日本との間における重要な商業的・文化的交流を生み出した。

### ●登録基準(iii)：

日本の金属採掘と生産における技術的発展は、小規模な「労働集約型経営」に基づく優れた運営形態の進化をもたらし、採掘から精錬までの一連の技術全体を包括するに至った。江戸時代の鎖国政策は、ヨーロッパの産業革命で発展した新たな技術の導入を遅らせた一方、銀鉱石の枯渇と連動するように19世紀後半には伝統的な状態で保存されることとなった。

### ●登録基準(v)：

鉱山の遺跡、街道、港など、採掘から精錬、搬出までの鉱山経営全体に関わる豊富な遺構の大部分は、現在では山林の景観に覆われている。その結果、文化的景観の「残

日本の遺産

089

16世紀前半の石見地方は、博多を拠点に中国、朝鮮との貿易も盛んに行っていた戦国大名の大内氏の支配下にあり、神屋寿禎もその保護の下、中国との貿易に深く関わっていた。産出した銀鉱石を、鉱山の西およそ6kmに位置する鞆ヶ浦港から船で博多に送っていたため、鞆ヶ浦には多く人が移り住み、次第に集落が広がった。1533年に神屋寿禎は博多から技術者を招聘し、朝鮮から伝來した「灰吹法<sup>はいふきほう</sup>」という新たな技術を用いて銀精錬を行って石見での銀生産量は飛躍的に増大。1540年代には高い技術を有する職人集団なども形成され、石見は日本における銀精錬技術の最先端の地となった。

1550年代、大内氏が内紛によって滅亡すると、銀山周辺では近隣地域の有力大名による争奪戦が勃発し、銀山の防衛を担う矢筈城や石見城では激しい攻防戦が繰り広げられた。1562年に争いを制した安芸地方の毛利氏は、銀山と港の間に、銀の搬出や鉱山に必要な物資の運搬を担う街道を新たに整備した。

1600年の関ヶ原の戦いの後、石見地方は徳川幕府の支配下に置かれ、奉行としてこの地にも派遣された大久保長安<sup>ながやす</sup>の下で鉱山経営が行われた。銀山経営の新たな拠点となる大森地区の整備などを進め、銀山経営の一部を「山師」と呼ばれる民間の業者に委ねるなど、さまざまな改革を行った。銀の產出量はさらに増加の一途をたどり、1620～1640年代に最盛期を迎えた。この時期には15世紀から続いている对外貿易もさらに活発化し、中国や朝鮮などの東アジアや、遠くヨーロッパの国々にも石見産の銀が流通していた。その後、銀の產出量は減少の一途をたどり、明治維新後の1869年、石見銀山は明治政府によって個人業者へと払い下げられた後、1923年に休山した。

### 保存上の課題など

ICOMOSは世界遺産登録に際し、登録基準(v)に関する更なる調査と、証拠となる文書の提出を求めた。また、観光客受け入れに関する問題の整理と、歴史的建造物の保護政策の明文化、未発掘の遺跡や木に覆われてしまっている遺跡に対する考古学的戦略の確立、そして水質汚染の調査と新しい自動車道の施工などの対策を勧めていた。これを受けて、街道を史跡に追加する、大森地区の景観を重要伝統的建造物群保存地区に追加するなど、保全体制を整えた結果、2010年の世界遺産委員会で石見銀山遺跡の登録範囲が軽微に拡大された。



龍源寺間歩



大森代官所跡

## TOPICS 構成資産の概要

### ▶ 銀山柵内

銀鉱石の採掘から選鉱・製錬・精錬まで、銀生産の一連の工程が行われた銀鉱山跡。16世紀から20世紀までの間に築かれた龍源寺間歩、清水谷精錬所跡、石銀遺跡、清水寺、唐人屋敷跡など、往時の暮らしの様子を物語るさまざまな遺構が良好な状態で残る。

### ▶ 大森・銀山

鉱山に隣接する谷間に発展した鉱山街。現在は南北約2.8kmの範囲に、伝統的な木造建築が立ち並ぶ集落が展開している。南側の要害山に近い「銀山地区」と北側の代官所跡に近い「大森地区」の2つの地区に分かれ、大森地区の北東側には、江戸幕府の役人が常駐した「代官所跡」がある。

### ▶ 鞆ヶ浦

16世紀前半に、博多に向けて銀鉱石や銀を積み出した幅34m、奥行き約140mの入り江。最初に築かれた港。湾の開口部には波除けとなる2つの小島があり、そのうちの1つには、最初に石見銀山を開発した神屋寿禎が建立した、弁天をまつる神社が立つ。

### ▶ 沖泊・温泉津

沖泊は狭隘な入り江を利用して築かれた港で、16世紀後半にかけて、精錬した銀の積み出しや石見銀山への物資の補給を担った。温泉津は、沖泊に隣接する温泉街と港。16世紀に日本海側における最大の港として賑わった街並には、木造建築なども残る。

### ▶ 石見銀山街道温泉津・沖泊道

温泉津や沖泊が、石見銀山の外港として機能していた16世紀の後半、銀の搬出と物資の搬入のために整備された街道。途中にある西田集落を中継地として、鉱山と温泉津や沖泊を結ぶ全長約12kmの道である。現在は石段や側溝のほか、街道の整備の際に石材が切り出された石切場の跡が残る。



広島県



文化遺産

## 広島平和記念碑(原爆ドーム)

Hiroshima Peace Memorial (Genbaku Dome)

登録年 1996年 登録基準 (vi)



### 登録基準の具体的内容

#### ●登録基準(vi) :

人類史上初めて使用された核兵器の惨禍を如実に伝えるものであり、時代を超えて核兵器の究極的廃絶と世界の恒久平和の大切さを訴え続ける人類共通の平和記念碑である。『広島平和記念碑(原爆ドーム)』のように、核兵器による被爆後の惨状をそのままの形で伝えている建造物はほかに存在しない。

登録時の登録基準(vi)には「この基準は、例外的な状況かつ、他の基準とあわせて用いられるべきであると考える」という但し書きがついており、その例外条件も満たしている。

### 遺産価値総論

『広島平和記念碑(原爆ドーム)』は、1945年8月6日8時15分に広島に投下された原子爆弾の被害を当時の姿のまま今に伝える建造物である。被爆前の広島県産業奨励館は、一部に鉄筋を用いた地上3階建てのレンガ造り。中央には、ドームの

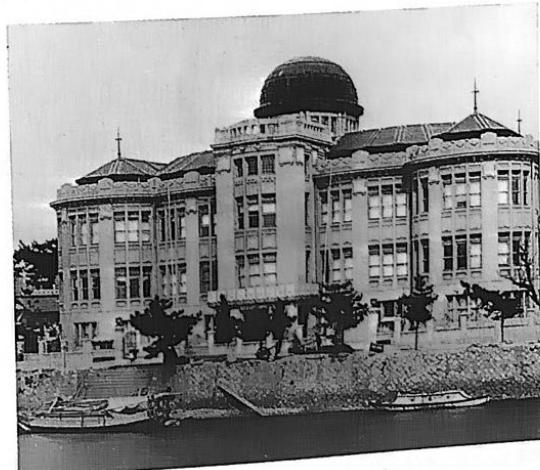
ある5階建ての階段室を備えていた。残された遺構や戦前に撮影された写真などの資料からは、「ネオ・バロック」の影響が確認できる楕円形のドームや湾曲した壁面、また、19世紀に起こった芸術運動であるウィーン分離派の「ゼソエッション様式」による柱頭や正方形の窓枠、幾何学模様を配置した装飾など、さまざまな建築様式が融合した往時の姿がうかがえる。当時としては珍しいモダンなデザインは、創建当初から広島市民の注目を集め、物産展をはじめ、さまざまな催し物が開かれる憩いの場としても愛された。

原爆投下では爆心地の北西約150mの至近距離で被爆し、爆風と熱線によって全壊・全焼した。建物の屋根や床はすべて破壊され、壁は建物の大部分において1階の上端以上が全て倒壊した。しかし、衝撃波をほぼ直上から受けたため建物の中心部分は倒壊を免れ、外壁と鉄骨の骨組みで、5階建ての円蓋を持つ建物であったことを今に伝えている。建物の南側に設けられていた洋式庭園の噴水も、破壊された遺構として残っている。

ICOMOSの報告書には「歴史的価値や、建造物としての価値は認められないが、世界平和を目指す活動の記念碑として、世界でもほかに例を見ない建造物である」との記述があり、登録基準(vi)のみで登録された。「負の遺産」と考えられる遺産は、登録基準(vi)のみで登録されることが多い。

### 歴史

1910年、広島県会は地域産業のさらなる振興を目指して「広島県物産陳列館」の建設を決定、設計にはチェコ出身の建築家ヤン・レツルが抜擢された。1915年に完成した建物は、その後「広島県産業奨励館」と改称された。1945年8月6日、アメリカ軍のB29爆撃機「エノラ・ゲイ」が広島市上空に侵入し、原子爆弾「リトル・ボーイ」を投下した。原子爆弾は、広島県産業奨励館から南東約150m、上空約580mの地点で炸裂し、広島の街は一瞬にして壊滅した。第二次世界大戦後、爆



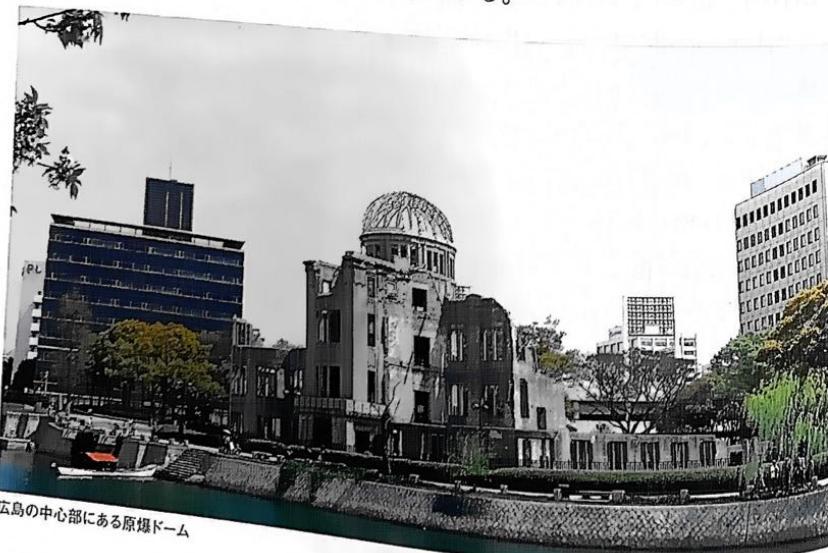
広島県産業奨励館

心地近くに残された旧広島県産業奨励館の廃墟は、屋根部分の円蓋鉄骨の形から、いつしか「原爆ドーム」と呼ばれるようになった。

この遺構については、広島市民の間でも長年「不幸の記憶」として解体すべきか、「平和の象徴」として保存すべきかについての議論が繰り返されていた。当初、広島市は風化や経年劣化による崩壊の危険性を考え、取り壊しも検討していたが、保存を願う市民運動の高まりを受け、1966年の広島市議会で原爆ドームの永久保存を決議した。同年には、保全のための募金運動が行われ、翌1967年には最初の保存工事が実施された。こうした保存工事は1989年と2002年にも実施されている。1992年、広島市長が世界遺産リストに記載すべく、UNESCOへの推薦を国に求めたが、「文化財ではない」という理由で却下されてしまう。それに対し、市民は1993年に「原爆ドームの世界遺産化をすすめる会」を発足させ、積極的な働きかけを行った。こうした市民運動は国会を動かし、1995年には文化財保護法の史跡指定基準が改正された。多くの国民の思いが結実し、1996年、世界遺産登録を果たした。

原爆ドーム周辺に広がる「平和記念公園」は、丹下健三の設計で1955年に完成した。同年8月には、広島平和記念資料館も開館し、館内では被爆の惨状を物語る遺品などの資料が展示されて、今日も訪れる多くの人々に原子爆弾による被害を伝えている。

広島市では、原爆投下の翌年である1946年8月に最初の「平和復興祭」が開催された。この式典は後に「平和記念式典」と引き継がれ、1952年からは平和記念公園にある「原爆死没者慰靈碑」の前で行われている。



広島の中心部にある原爆ドーム

## 保存上の課題

『広島平和記念碑(原爆ドーム)』の保存にはいくつかの課題がある。1つは、破壊された当時の状態にいかに保つかという点。むきだしの鉄骨や壁のひびなどを、風雨や地震から守る工夫が求められている。2つめは、広島市の中心部に立つ『広島平和記念碑(原爆ドーム)』の景観をいかに守るかという点。バッファー・ゾーン(緩衝地帯)での高層マンション建設や再開発計画などが問題となっている。

## 世界遺産登録時の状況

1996年の第20回世界遺産委員会で登録の可否が審議された際、世界遺産委員会委員国であったアメリカ合衆国と中華人民共和国は、世界遺産リストへの記載の決議に反対はしないものの、審議後に下記の声明をだした。

### ●アメリカ合衆国の声明(大意)

我々は、今回の原爆ドームの世界遺産への推薦に関し、歴史的な視点が欠如していることを懸念する。我々が、第二次世界大戦を終結させるために、核兵器を使用する状況を迎えることになるまでに起きたさまざまな事件を知ることが、広島で起きた悲劇を理解する上で重要になる。1945年を迎えるまでの歴史的な流れの精査が必要である。我々は、戦争に関する物件の登録審議が本会議の範疇から外れていることを確信しており、委員会に対し、戦争関連物件の世界遺産登録に関する妥当性の審議に取り掛かることを強く要望する。

### ●中華人民共和国の声明(大意)

第二次世界大戦中、アジア各国、及びその国民たちは侵略や虐殺などのつらい歴史を経験してきた。しかし、現在においても、その事実を否定し続ける人が、少数であるが存在する。このような状況の中、稀有な例といえるかもしれないが、広島平和記念碑の世界遺産登録が、前述のような少数の人たちによって悪用されないと限らない。当然、このようなことは、国際平和の維持に良い効果をあげるものではない。



広島県



## 厳島神社

Itsukushima Shinto Shrine

登録年 1996年

登録基準 (i)(ii)(iv)(vi)



### 登録基準の具体的内容

#### ●登録基準(i)：

12世紀に平清盛によって造営された社殿は、平安時代の寝殿造りの様式が取り入れられており、海上にせり出した建造物が背後の山と一体となりつくり出す優れた建築景観は、造営に携わった平清盛の卓越した発想を示している。

#### ●登録基準(ii)：

自然を崇拜し、山などを神体として祀る社殿のつくりは、日本の社殿建築の發展を示している。日本人の美意識の基準となった山や海などの自然環境と建造物が融合して織りなす独自の景観は、日本人の精神文化を理解する上で重要である。

#### ●登録基準(iv)：

13世紀に建造された本殿や拝殿などは、創建当時の様式を残す。最初に社殿が整備された平安時代の面影を残し、度重なる再建を経ても平安時代から鎌倉時代にかけての様式を現在まで継承している。海上に築かれた社殿群は、自然崇拜から發展した、周囲の景観と一体をなす古い形態の社殿群の姿を今に伝える重要な見本である。

#### ●登録基準(vi)：

日本の風土の中で育まれてきた神道の施設であると共に、その神道が大陸から伝來した仏教と混合、分離してきた歴史を物語る遺産である。日本における宗教的空间の特質を理解する上で重要である。

### 遺産価値総論

『厳島神社』は、古くから聖域とされていた弥山(瀬山)の深い緑を背景に、海上に突き出す鮮やかな朱塗りの社殿が広がる、他に類のない独特の景観を持つ建造物群である。この景観は、当初は海を隔てたるか対岸から眺む対象とされていた島に、次第に社殿が築かれるようになり、それらが背後にそびえる弥山の山容と共に受容されていく過程で次第に形成されていった。

現存する建造物は、原始的な社殿を現在のような姿に発展させた平清盛の卓抜した構想力と美的センスを示すと共に、日本人の信仰心や精神文化の発展の過程を知る上でも、重要な史料とされる。これらの社殿は、北向きに立てられた本社の社殿群と、西向きに立つ摂社客神社の社殿群が、海の上をわたる回廊で結ばれた構造をもっている。こうした建造物の配置や、各社殿における細部の様式、ゆるやかな曲線をもつ「檜皮葺」の屋根などには、平安時代以降、貴族などの支配者階級の住宅様式として広がった「寝殿造り」の影響が見られる。寝殿造りは神社建築には用いられてこなかったが、平清盛が厳島神社において神社建築に取り入れた。

島内には厳島神社の他、背後の丘陵地帯を中心に中世以降に創建された仏教建築も残されており、日本における神仏習合の思想のなかで、島内の宗教施設がどのような変遷を遂げてきたかを物語っている。こうした建造物群と自然景観が生み出す厳島の景観は、日本で独自に発展を遂げた宗教的空间の特性を知る、貴重な手がかりである。



□ 厳島神社

## 歴史

瀬戸内海に浮かぶ厳島は、標高 530m の弥山が海上に映えるその姿から、古くから「神の島」として信仰を集めてきた。島自体がご神体とされていたため、当初は海を挟んだ対岸や海上から遙拝する対象とされたが、いつしか島の水際に社殿が築かれるようになった。社伝によると、最初の



客神社

神社の創建は593年とされる。平安時代末期、保元・平治の乱などを経て権力を掌握した平清盛は、宋との貿易に力を入れ、その航路となる瀬戸内海の整備を積極的に推進した。それに伴い、かねてより信仰を寄せていた厳島を「海上の守り神」とし、社殿の整備に取り組んだ。このとき造営された社殿は、1207年の火災でほとんどが焼失したが、1241年に再興され、現在の社殿の起源となった。室町時代後期頃には島内に市が開かれ、次第に市街地も発達していった。また、中世以降には平安時代初期に空海が開いた弥山山頂部の寺院などが一般庶民の信仰を集めることで、島を訪れる参拝者も次第に増加した。

海上にせり出す社殿は、高波や台風によって何度も被害を受けたが、その度に時の権力者や地域の有力者の支援のもと再建され、往時の姿を留め続けてきた。厳島のシンボルである海上の大鳥居\*も、しばしば倒壊と再建を繰り返した記録が残されており、1547年の再建の際に控柱を持つ両部鳥居の形式となった。島内では、1407年創建の五重塔、1523年創建の多宝塔、そして桃山時代に豊臣秀吉によって建造された豊国神社本殿(千疊閣\*)などの新たな建造物も加わり、現在のような神社と寺院、そして周辺の自然環境が一体となった景観が完成した。



大鳥居

大鳥居：現在の大鳥居は、1850年の台風で被損した後、1875年に再建されたもの。千疊閣：857畳の大広間を持つことから「千疊

## TOPICS

### 構成資産の概要

#### ▶ 厳島神社・本社

本社の本殿、幣殿、拝殿、祓殿、高舞台、平舞台といつた主要な建造物が、海上の大鳥居との一直線の軸上に並ぶよう配されている。縦長の祓殿の背後に接するように横長の拝殿、その奥の陸側に本殿が連なり、さらに拝殿と本殿の間には幣殿が巡らされている。祭神として市杵島姫命、田心姫命、湍津姫命の宗像三女神を祀っている。1546年に設けられた平舞台中央の高舞台では、1,000年以上代々の神職によって守り伝えられてきた舞楽が行われる。



舞楽

#### ▶ 摂社客神社

本社と東廻廊で結ばれた社殿群で、本社の北東に位置する。建物の形式や配置は本社とほぼ同じだが、規模は一回り小さい。建造物は全て1223年の火災で焼失し、現存するのは1241年に再建されたもの。

#### ▶ 能舞台

本社と西廻廊で結ばれる能舞台は、江戸時代の1680年に改築されたもの。日本で唯一海に浮かぶ能舞台。海上にあるため、一般的な能舞台では共鳴のために床下に置かれている甕が無く、根太と呼ばれる床下の角材の断面を六角形にし、床板との接触面積を減らすことで、大きく響くように工夫されている。



#### ▶ 豊国神社本殿、五重塔、多宝塔

豊国神社本殿は、豊臣秀吉が僧の惠瓊に建立を命じた寺院を起源とする。五重塔は、和様建築の様式の一部に、禅宗様を取り入れた折衷様式が特徴。多宝塔は、外觀に和様、内装の装飾などに大仏様と禅宗様の建築様式が見られる。

#### ▶ 弥山原始林

古くから神域とされた自然林で、貴重な植生を残す山中は1929年に天然記念物に、1957年には特別保護区となった。山頂付近には、弘法大師(空海)が嚴島で修行した際に護摩の火として灯し、以来1,200年にわたり燃え続けていると伝えられる「消えずの靈火」が残る。



## 遺産の概要

九州北部の福岡県宗像市と福津市にある『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群は、「沖ノ島」を含む「宗像大社」と「新原・奴山古墳群」で構成される8資産からなる。構成資産全体で宗像・沖ノ島の信仰の歴史を証明している。

中心となる「沖ノ島」は、九州本土から約60kmの玄界灘の海上に位置し、日本列島から朝鮮半島や中国大陆へと向かう航海上の目印となる島であった。そのため島自体が自然崇拜の信仰を集め、4世紀頃から約500年もの間、海の航海の安全を祈る場所として国家的な祭祀が行われてきた。4世紀頃というのは、ヤマト王権と朝鮮半島の百濟の結びつきが強まった時期である。沖ノ島には、そうした交易の証拠と祭祀の跡が残されている。

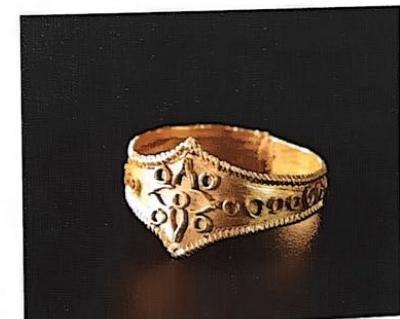
巨岩の上で祭祀を行う「岩上祭祀」から、庇状になった岩の陰で行う「岩陰祭祀」へ、そこから「半岩陰・半露天祭祀」を経て、平らな場所で祭祀を行う「露天祭祀」へと、祭祀の形態が変化していくことがよくわかる証拠が残されている。それぞれの場所で「銅鏡」や「金製指輪」、「カットグラス碗片」、「雛形五弦琴」、「富寿神宝」など、約8万点もの各時代の貴重な奉納品が発見され、その全てが国宝に指定されている。沖ノ島が、人の訪れにくい海上の島であることや、島 자체をご観の交流を明らかにしている。

沖ノ島は1,500年以上にわたって信仰の対象となってきた。沖ノ島を「神宿る島」として崇め、入島を制限する禁忌は人々の間で現在でも守られている。また、沖ノ島と大島、九州本土の宗像大社三宮では、宗像三女神の信仰が生まれ現在に伝えられており、この遺産は「神宿る島」を崇拜する文化的伝統が、古代から今日にいたるまで発展し継承されてきたことを示す貴重な証拠である。

「宗像大社」は、自然崇拜から始まった沖ノ島の信仰が、「宗像三女神」という人格をもった神に対する信仰へと発展し、その両者が共存しながら「宗像・沖ノ島」の信仰を形作ったことを証明している。また、「露天祭祀」から「社殿を持つ祭祀」へと発展したことも示している。8世紀はじめの『古事記』や『日本書紀』\*にも名前が記されており、古くより信仰が行われてきた証拠となっている。



4~5世紀の岩上祭祀跡



5世紀頃の純金製指輪(宗像大社神宝館所蔵)

福岡県



文化遺産

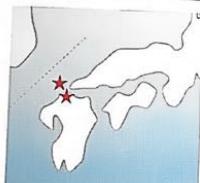
## 『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群

Sacred Island of Okinoshima and Associated Sites in the Munakata Region

登録年

2017年

登録基準 (ii)(iii)



### 登録基準の具体的内容

#### ●登録基準(ii):

日本の古代国家は沖ノ島の神を東アジアにおける対外交流の航路の守り神としたため、当時の先進技術で作られた奉納品を用いて古代祭祀が行われた。沖ノ島には、4世紀後半から9世紀末の約500年間の古代祭祀の変遷を伝える考古遺跡が、ほぼ手つかずの状態で残っている。この古代祭祀の変遷は、中央集権国家形成期の東アジアで、日本が行った活発な対外交流の実態を反映し、当時の東アジアでの価値観の交流を明らかにしている。

#### ●登録基準(iii):

沖ノ島は1,500年以上にわたって信仰の対象となってきた。沖ノ島を「神宿る島」として崇め、入島を制限する禁忌は人々の間で現在でも守られている。また、沖ノ島と大島、九州本土の宗像大社三宮では、宗像三女神の信仰が生まれ現在に伝えられており、この遺産は「神宿る島」を崇拜する文化的伝統が、古代から今日にいたるまで発展し継承されてきたことを示す貴重な証拠である。

\*古事記や日本書紀:『古事記』では「奥津宮」「中津宮」と、『日本書紀』では「遠瀛」「中瀛」「海浜」と記載されている。

## 歴史

3世紀頃、日本の中央に強大な政治連合であるヤマト王権が登場した。4世紀後半になると、ヤマト王権は朝鮮半島の百済と友好関係を結び、朝鮮半島に対して直接的に関与するようになった。ヤマト王権は、対外交流によって中国大陸や朝鮮半島の古代王朝から鉄資源や当時の優れた技術や文化、知識を入手し、その勢力を強化させていった。

ヤマト王権が対外交流を行うためには、**日本列島と朝鮮半島との間の海を越える航洋術を持つ宗像氏**の協力が不可欠であった。宗像氏は航海の道標となる沖ノ島を信仰しており、宗像氏の協力を得たヤマト王権は、宗像氏が信仰する沖ノ島で祭祀を行うようになった。こうして「国家的祭祀」として始まった沖ノ島の祭祀では、質・量ともに傑出した奉納品が納められた。宗像氏もまたヤマト王権の対外交流に協力することでその勢力を拡大させていった。

6世紀末、中国大陆を隋が統一すると、日本から遣隋使が派遣され、その後の唐には630年に初めての遣唐使が送られた。その後も、9世紀に至るまで、文化や法制度などを手に入れるため遣唐使や朝鮮半島の新羅への使者の派遣は続き、沖ノ島のみならず大島や本土でも、数多くの奉納品を用いて祭祀が行われた。

## 保全上の問題

ICOMOSの事前勧告では、沖ノ島と小屋島、御門柱、天狗岩の4資産にのみ「登録」勧告が出されたが、世界遺産委員会では日本の主張した三社一体の信仰が評価通り(ii)(iii)のみ認められ、(vi)は認められなかった。伝統の担い手の高齢化も進重要な課題である。

また世界遺産委員会では、緩衝地帯などの開発の影響評価や、上陸が禁忌とされる沖ノ島への不法上陸対策、遺産の管理体系の明確化などが求められた。



沖ノ島にある宗像大社沖津宮

## ▶宗像大社沖津宮

「沖ノ島」とそれに付随する岩礁「小屋島」と「御門柱」「天狗岩」からなる信仰の場。3つの岩礁は物理的に沖ノ島から離れていることから個別の構成資産として区別されているが、価値の観点からは実質的に不可分であり、沖津宮という1つの神社を構成している。沖津宮は宗像大社三宮の1つであり、宗像三女神の一柱である田心姫神が祀られている。



## ▶宗像大社沖津宮遙拝所

沖ノ島から約48km離れた大島にある信仰の場。禁忌によって通常は渡ることのできない沖ノ島を遠くから拝むために、宗像大社の一部として設けられた。晴れて空気の澄みきった日には、ここから沖ノ島を望むことができる。

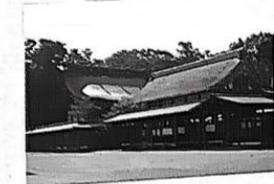
## ▶宗像大社中津宮

中津宮は宗像大社を構成する三宮の1つであり、宗像三女神の一柱である湍津姫神が祀られている。宗像大社沖津宮遙拝所と同様に大島にある。現在の中津宮本殿は、17世紀前半の再建とされている。



## ▶宗像大社辺津宮

辺津宮は宗像大社を構成する三宮の1つであり、宗像三女神の一柱である市杵島姫神がまつられ信仰されている。現在の宗像大社の神事の中心となっている。辺津宮社殿は遅くとも12世紀には存在していたことが記録により分かれている。現在の辺津宮本殿は1578年に再建されたものであり、拝殿は1590年に再建されたものである。



## ▶新原・奴山古墳群

新原・奴山古墳群は、沖ノ島祭祀をとり行い、沖ノ島を信仰する伝統を継承した宗像氏の墳墓群。本土から沖ノ島へと続く海を望む台地上に、5世紀から6世紀という比較的長期にわたって41基の大小さまざまな墳墓が一体的に築かれている。





日本では珍しい石造りの頭ヶ島天主堂

長崎県・西本願



### 長崎と天草地方の 潜伏キリシタン関連遺産

Hidden Christian Sites in the Nagasaki Region

文化遺産

登録年 2018年 登録基準 (iii)



### 登録基準の具体的内容

#### ●登録基準(iii)：

この遺産は、長崎と天草地方で潜伏キリシタン\*達が、禁教期に密かに信仰を続ける中で育んだ独自の宗教的伝統の存在を証明している。

長崎と天草地方の潜伏キリシタン達は、江戸時代から明治期にかけて約250年にわたり続いた禁教期に、密かに固有の信仰を伝えることで独自の宗教的伝統を育んだ。この宗教的伝統は、明治期に入って禁教が解かれる終焉に向けて、徐々に変容していった。12の構成資産はこの変容の過程を表している。

#### 遺産の説明

『長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産』は、2県8市に点在する10の「集落」とそれれ1つの「城跡」と「聖堂」という、12の構成資産からなる。構成資産が示す宗教的伝統の歴史的な過程は、大きく4つの時代に分けられている。

潜伏キリシタン：禁教期にキリスト教由来の信仰を守り続けた人々のこと。

ト教を伝えてから、1550年に平戸で布教を行い人々の間にキリスト教の教えが浸透していく一方、豊臣秀吉や徳川幕府によってキリスト教信仰が禁止され、キリストian達が禁教の下でも密かに信仰を続けることを決意する時代。「島原・天草一揆」の主戦場である「原城跡」がこの時代を証明している。こ

の一揆が江戸幕府に大きな衝撃を与え、その後の海禁体制(鎖国)が確立されるとともに、潜伏キリストianの歴史が始まった。

「2.形成」は、潜伏キリストian達が神道の信者や仏教徒などを装いながら、密かにキリスト教信仰を続ける方法を作り上げていった時代。「平戸の聖地と集落」や「天草の崎津集落」などの構成資産がこの時代を証明している。

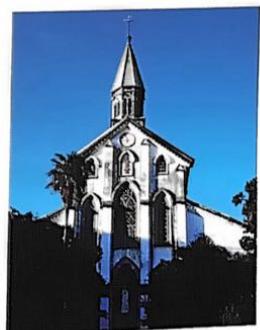
「3.維持、拡大」は、潜伏キリストianの信仰を続けるために、外海地域からより信仰を隠すことができる五島列島の島々に移住していった時代。「頭ヶ島の集落」や「野崎島の集落跡」がこの時代を証明している。五島への移住は藩の開拓移民政策と深く関係しており、共同体を維持したい潜伏キリストian達と未開地に移民を進める五島藩と大村藩(外海のある地域)の共通の思惑から、そとのめ移民のキリスト教信仰が黙認されていた側面もあった。

最後の「4.変容、終わり」は、約200年ぶりにキリスト教の信仰を公に告白し世界中を驚かせた「信徒発見」から教会堂が築かれてゆく時代である。この時代を証明するのが、この世界遺産のシンボルともいえる国宝の「大浦天主堂」。1865年に浦上地区の潜伏キリストian達が大浦天主堂を訪れ信仰を告白した「信徒発見」は、奇跡としてローマ教皇にも伝えられた。その後1873年にキリスト教が解禁されると潜伏キリストian達は、カトリックに復帰する者や仏教や神道を信仰する者、禁教期の信仰を続ける者(かくれキリストian)などへと分かれていった。

『長崎と天草地方の潜伏キリストian関連遺産』は、日本の遺産としては初めて、諮問機関であるICOMOSとアドバイザーアクションを結び推薦書の作成を行った。推薦書作成時にICOMOSからアドバイスをもらい、推薦書の不備や価値証明が不十分であるなどの問題をなくすことを目指す新たな試みであった。



野崎島の旧野首教会



大浦天主堂

## 歴史

日本の西端に位置する長崎は16世紀後半、海外との交流の窓口であったため、多くの宣教師が定住し、人々は長期にわたり直接、宣教師から指導を受けることができた。そのため、長崎と天草地方の民衆の間には、他の地域に比べてキリスト教の信仰が深く定着した。

17世紀、江戸幕府によって禁教政策がとられ、宣教師の国外追放や教会堂の破壊が行われた。

1644年に最後の宣教師が殉教し、日本国内から宣教師がいなくなると、日本のキリスト教徒達は自分たちで信仰を続けていかなければならなくなつた。長崎と天草地方ではこうした背景の下、2世紀以上に及ぶ長い禁教期に独自の信仰形態が生まれた。



「島原・天草一揆」の主戦場となった「原城跡」

## 保全上の課題など

構成資産として登録された集落の多くでは、高齢化と人口減少が続いている、遺産を保護する担い手が不足するのではないかと懸念されている。実際に「野崎島の集落跡」がある野崎島のように、すでに無人化している場所もある。また、観光化によって、静かな祈りの環境が乱されるのではないかとの指摘もある。

### TOPICS 構成資産の概要

#### 1. 始まり(17世紀初頭～中頃)

▶原城跡 禁教初期に島原半島南部と天草地方のキリスト教徒が起こした「島原・天草一揆」の主戦場となった城跡。考古学的な発掘調査では、多数の人骨とキリスト教の信心具が出土した。

#### 2. 形成(17世紀中頃～19世紀初頭)

▶平戸の聖地と集落「春日集落と安満岳」「中江ノ島」 キリスト教伝来以前から山岳信仰の場であった安満岳や、キリスト教の殉教地の中江ノ島を聖地として独自の信仰を続けた集落。

▶天草の崎津集落 生活、生業に根差したアワビ貝など身近なものをキリスト教の信心具として代用し、漁村特有の信仰を続けた集落。大黒天や恵比寿神をキリスト教の唯一神デウスとして崇拜した。

▶外海の出津集落 聖画像をひそかに拝むことによって自らの信仰を隠し、教理書や教会暦をよりどころとして信仰を続けた集落。この地域の信者が五島列島など離島部へ移住していった。

▶外海の大野集落 表向きは仏教徒や集落内の神社の氏子となって神道を装いながら、信仰対象の神社を祈りの場として信仰を続けた集落。

#### 3. 維持、拡大(18世紀末～19世紀中頃)

▶黒島の集落 平戸藩の耕作移住の推奨に応じて、牧場跡の再開発地となっていた場所に移住し、仏教寺院で密かに信仰を続けた集落。

▶野崎島の集落跡 神道の聖地であり、沖ノ神嶋神社の神官と氏子の居住地の他は未開拓地となっていた野崎島に移住し、神道への信仰を装いながら信仰を続けた集落。

▶頭ヶ島の集落 病人の療養地として使われていた島へ、仏教の開拓指導者に従って移住することで信仰を続けた集落。

▶久賀島の集落 五島藩の開拓移民政策に従い、未開拓地に移住して信仰を続けた集落。

#### 4. 変容、終わり(19世紀後半)

▶奈留島の江上集落(江上天主堂とその周辺) 既存の集落から離れた海に近い狭い谷間に移住し、地勢に適応しながら信仰を続けた集落。

▶大浦天主堂 日本の開国により来日した宣教師が1864年に建てた教会堂。建設には天草出身の日本人棟梁が関わった。1953年に洋風建築として初めて国宝に指定された。



高島炭鉱の主力坑として栄えた高島炭鉱(原鉱)

福岡県・長崎県・佐賀県・鹿児島県・熊本県・山口県・岩手県・静岡県



### 明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業

Sites of Japan's Meiji Industrial Revolution: Iron and Steel, Shipbuilding and Coal Mining

文化遺産

登録年 2015年 登録基準 (ii)(iv)



### 登録基準の具体的内容

#### ●登録基準(ii):

近世末から近代初頭、おもに九州や山口を舞台とする日本の近代化は、ヨーロッパの先進諸国からの積極的な技術導入の下進められた。日本の近代化における重要な産物の1つとなった「石炭」は、ヨーロッパ諸国の船舶用燃料として上海や香港などにも輸出され、東アジア海域における海運網を支えた。東アジア及びヨーロッパの先進諸国と日本との間における文物や文明の交流を示す。

#### ●登録基準(iv):

日本は19世紀半ばから始まった近代化に向けた取り組みを通じて、西洋以外の地域でははじめての飛躍的な経済的発展を、わずか約50年間という短い期間で達成した。こうした歴史上の重要な段階を物語る建築物を、1つの集合体として捉えることのできる顕著な例である。

## 遺産の概要

明治以降の日本の近代化の中で重要な役割を果たした九州地方を中心に点在する産業遺産群。日本の近代化を支えた「造船」「製鉄・製鋼」「石炭産業」などの施設や遺構などが含まれる。江戸末期から明治時代の約半世紀という短い期間で国家の価値観を変えて近代化し、すでに産業革命を成し遂げた西欧の技術を学ぶことで急速な産業化を果たした歴史的価値を証明している。世界でも例のない近代化のプロセスを知る上でも重要な遺産とされている。

23件の構成資産は、九州5県(福岡県、長崎県、佐賀県、鹿児島県、熊本県)、山口県、岩手県、静岡県の全国8県11市に点在しており、シリアル・ノミネーション\*として登録されている。稼働中の資産を含むため、文化財保護法だけでなく、港湾法や景観法などを組み合わせて保護計画が立てられており、文化庁ではなく内閣官房が推薦した。

## 歴史

江戸時代末期の1850年代から明治時代が始まる1860年代。日本は諸外国の脅威に対する国防の必要性に迫られていた。鹿児島では薩摩藩主の島津斉彬が富国強兵・殖産興業の政策として、製鉄や鉄製大砲の鋳造、ガラス製造、活版印刷などをを行う集成館を造り、山口では、吉田松陰が私塾(松下村塾)を主宰し、後の日本の近代産業化を担う多くの人材を育て上げた。

明治初期の1870年代から1880年代。明治政府が1868年に誕生すると、西洋の技術者を日本に招き、積極的に西洋の知識や技術を取り入れ、専門知識や技術を実際の産業に活かしながら近代化の基礎が築かれた。開国により外国の蒸気船の燃料として石炭の需要が高まると、佐賀藩がトマス・グラバーとともに開発した高島炭坑で、日本初の蒸気機関を用いた採掘が始まった。

明治時代の1890年代から1910年まで。西洋の専門知識や技術を日本の実情や文化、伝統に合わせて発展させ、日本独自の産業化が花開いた。長崎では高島炭坑の技術を受け継いだ端島炭坑が本格的に操業を開始し、高品質の石炭を産出した。福岡では、國家の威信をかけた大プロジェクトとして官営八幡製鐵所が操業し、日本の産業近代化を支えた。三池炭鉱では炭鉱と三池港を結ぶ鉄道が敷かれており、これが世界初の炭鉱専用鉄道として知られる。



三池炭鉱(万田坑)

\*シリアル・ノミネーション: 歴史・文化的な背景などが共通する複数の資産を、1つの「顕著な普遍的価値」を示す遺産として登録する方法。

れ、炭鉱から港までが一体となった炭鉱産業システムが完成した。三池港や八幡製鐵所など、現在も稼働している資産も含まれる。

### 保全上の課題など

この遺産は、現在稼働中の資産を含むため、老朽化による建て替えの問題や保護の責任、予算など、課題が多い。また、端島炭坑跡のように廃墟となっている遺産を、どのように保護してゆくとよいのか、最終的な解決策は未だ検討中である。

#### TOPICS

#### 構成資産の概要

#### ► 端島炭坑：長崎県長崎市

長崎港の南西約18kmに浮かぶ島。炭坑の開発とともに従業員も増加し、狭い島に多くの人が住むために島内には高層鉄筋アパートが次々に建設された。その独特的な景観から「軍艦島」とも呼ばれた島には、最盛期には5千人を超す人が生活していた。

#### ► 三菱長崎造船所・旧木型場：長崎県長崎市

1857年に創業された三菱長崎造船所の木型場。1898年に鋳物の木製模型を製作する作業場として建設されたもので、長崎造船所に現存する最古の建造物。屋根を支える「小屋組」のトラスを備えた2階建て煉瓦造り。

#### ► 旧グラバー住宅：長崎県長崎市

1859年にスコットランドから来日し、長崎に貿易取引を行う「グラバー商会」を設立したトマス・ブレーク・グラバーの住宅。英国コロニアル様式と日本の伝統的な建築技術が融合している。



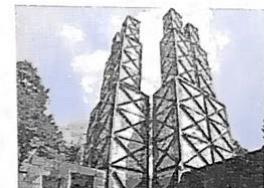
#### ► 三菱長崎造船所ジャイアント・カンチレバークレーン：長崎県長崎市

1909年に日本で初めて建設された電動クレーン。当時最新式だったイギリスのアップルビー社製。1961年には当時の「船の浦岸壁」から「水の浦岸壁」に移設され、現在は機械工場で製造した蒸気タービンを船積みする際に使用されている。



#### ► 萩山反射炉：静岡県伊豆の国市

19世紀のアヘン戦争などを受け、欧米列強に対抗するための海防用の鉄製大砲を鋳造する目的で、萩山の代官であった江川太郎左衛門英龍によって建造された反射炉。実際に稼働していた反射炉としては、国内で唯一現存するもの。



#### ► 関吉の疎水溝：鹿児島県鹿児島市

集成館の高炉や鑛開台(砲身に穴を開ける装置)などの動力源であった水車動力用の水を供給するために築かれた全長7kmの疎水(水路)。水源の関吉には当時の取水口跡が残るほか、疎水溝の一部は現在も灌漑用水として利用されている。

#### ► 橋野鉄鉱山：岩手県釜石市

日本鉱業界の第一人者の盛岡藩士大島高任によって建造された洋式高炉と、鉄鉱石を産出していた鉄鉱山の跡。1858年には、日本初の連続出銘に成功した。

#### ► 高島炭坑：長崎県長崎市

1868年に、佐賀藩とスコットランド出身の商人トマス・グラバーによって開発された海洋炭坑。1869年には、イギリス人技術モーリスがこの地に招聘され、日本初の蒸気機関による豊富である「北渓井坑」が開坑した。1881年からは三菱の所有となった。

#### ► 三池炭鉱(万田坑)：熊本県荒尾市

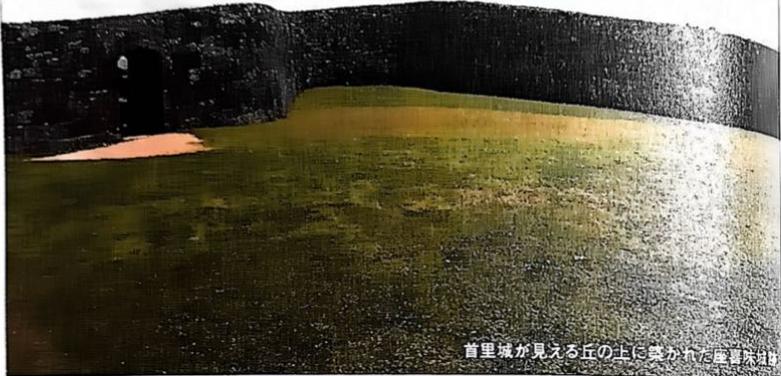
1902年に操業開始した熊本県荒尾市の坑口。三池炭鉱宮原坑とともに明治から昭和にかけて三池炭鉱の主力を担った。第二豊富と鋼鉄製の櫓、レンガ造りの巻揚機室、ポンプ室(旧扇風機室)など、明治時代に築かれた石炭採掘に関するさまざまな施設が良好な状態で残る。

#### ► 三池炭鉱(宮原坑)：福岡県大牟田市

国内外の石炭需要を支えた三池炭鉱の明治から昭和初期にかけての主力坑。1930年、政府によって坑内における囚人労働を禁止する通達が出されたことで、翌年三池集治監(当時は三池刑務所)の閉鎖が決定し、1930年3月をもって閉坑。

#### ► 官営八幡製鐵所旧本事務所：福岡県北九州市

官営八幡製鐵所の初代本事務所として、創業の2年前の1899年に竣工した赤レンガの建造物。中央にドームを備える左右対称形の建造物の内部には、長官室や技官室の他、海外から招聘した外国人顧問技術室などもあった。



沖縄県



文化遺産

## 琉球王国のグスク及び関連遺産群

Gusuku Sites and Related Properties of the Kingdom of Ryukyu

登録年 2000年

登録基準 (ii)(iii)(vi)



### 登録基準の具体的内容

#### ●登録基準(ii) :

グスク跡などの登録物件は、日本、中国、さらには東南アジア諸国との政治的、経済的、文化的な交流の過程で成立した独立王国の中で築かれたものであり、独自の発展を遂げた琉球地方の特殊性を示している。

#### ●登録基準(iii) :

グスク跡は、農村を基盤に成長した豪族(按司)<sup>あじ</sup>が、防衛のために築いた城塞跡であり、今は失われた琉球社会の象徴的な考古学的遺跡である。これらは歴史的にも農村集落の中核をなしており、先祖への崇拜と祈願を通じて、住民同士の連帯を深める心のよりどころとして、今も重要な役割を果たしている。

#### ●登録基準(vi) :

現在残る遺構や建造物は、琉球地方における独特の信仰形態の特質を表している。グスク跡は農村集落の聖域としての機能を備えているものも多く、学術的に重要なだけではなく、現在も祭祀が行われるなど地域住民にとっての精神的のよりどころとなっている。

ころとなっている。国家の祭祀拠点であった「斎場御嶽」は、海の彼方に「ニライカナイ」と呼ばれる神の国があるとする琉球独自の自然崇拜的な信仰と密接に関連している。第二次世界大戦で大きな被害を受けた沖縄が復興する際にも、沖縄県民にとっての精神的のよりどころとしての役割も果たした。

### 遺産の概要

おもに12～16世紀にかけて沖縄地方で数多く建造された「グスク」と呼ばれる城塞建築を中心とする遺構。日本や中国、東南アジアなど、多くの国々との交易圈にあたる沖縄地方では、中継貿易による豊かな経済的発展を背景に、15世紀に独立国である琉球王国が成立し、中国や日本など周辺国からの影響を受けながらも、技術・芸術的に優れた文化が独自の発展を遂げていった。琉球王国成立に前後して築かれた数多くのグスク跡の石積みに用いられた独特の石の加工技術などからも、ほかの地域とは異なる発展を遂げた、琉球独自の文化や技術を見ることができる。

グスクとは、もともとは野面積み<sup>\*</sup>の石垣を備えた自衛的農村集落を意味する言葉だつたが、按司が群雄割拠した12世紀頃にその居城としてのグスクが成立し、やがて現在に遺構が残る、切石積みの堅牢な石垣を備えた大規模グスクへと発展した。これらグスクは、農村における防衛的な城塞であるだけではなく、集落に暮らす人々の自然崇拜や先祖崇拜における聖域となっていたものが多く、琉球独自の信仰形態や宗教文化を知る上でも貴重である。グスクの遺構には「拝所<sup>うがんじゆ</sup>」と呼ばれる宗教的聖地を備えたものもあり、今なお多くの沖縄の人々の心のよりどころとなっている。

### 歴史

沖縄地方では、10世紀頃から自衛的な農村集落が成立した。こうした集落を基盤に台頭したのが、按司と呼ばれる豪族である。12世紀になると有力按司が各地に台頭し、沖縄地方は群雄割拠の時代であるグスク時代を迎えた。現在遺構が残るグスクの多くは、これら有力按司が居住と防衛のために建造したものである。

15世紀になると、有力按司のなかから複数の按司を束ねる「王」が登場し、沖縄地方には「北山」「中山」



斎場御嶽

\* 野面積み：自然の石をそのまま積み上げる積み方。

「南山」と呼ばれる3つの小王国<sup>\*</sup>が成立した。三国は、おもに中国との交易を背景に勢力を伸ばし、各地のグスクもより強固で、大規模なものへと発展をとげた。ミクによる対立状態が続く中、中山が1429年に統一を果たし、琉球王国が誕生した。1458年に勝連城を拠点とする按司の阿麻和利の乱が勃発したが、これを鎮圧したことによって中央集権国家としての体制が整った。1477年に第二尚氏第三国王尚真のもと行われた城下の整備や、王族の女性を神職とする神女組織の創設などをはじめとする祭政一致の改革が行われた。

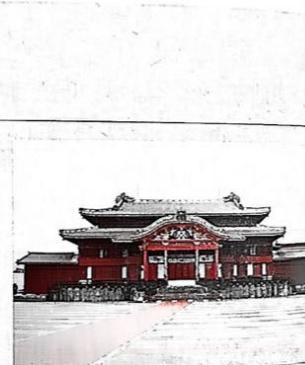
1945年、沖縄にアメリカ軍が上陸し、各地で繰り広げられた激しい戦闘の中、首里城などのグスクをはじめとする多くの文化財が破壊された。

#### TOPICS

#### 構成資産の概要

##### ▶ 首里城跡

三山時代の中山王の居城。琉球王国成立後、政治、経済、文化の中心地となった。正殿、北殿、奉神門などの建造物を囲む総延長1,080mの重厚な城壁の石積みには「布積み<sup>\*</sup>」「相方積み<sup>\*</sup>」が混在する。地上部分の建造物群は、沖縄戦で焼失し再建されたが、2019年に正殿などが再び焼失した。



##### ▶ 今帰仁城跡

三山時代は北山王の居城。琉球王国の成立後は、王府から派遣された「北山監守」の居城として使用されていた。東面を川、西面を谷、さらに南面を急斜面の丘に囲まれた要害の地に立地しており、周囲には自然石をそのまま積み上げる「野面積み」の城壁が曲線を描くように巡らされている。



##### ▶ 座喜味城跡

沖縄本島中部の読谷村の西海岸に残るグスク跡。15世紀に有力按司の護佐丸によって造営された。現在、グスク跡には城壁や、沖縄最古とされるアーチ型の城門などが良好な状態で保存されている。また、政情安定を願う守護神がまつられていた拝所は、現在も地域住民からの信仰を集めている。

<sup>\*</sup>3つの小王国：この時代は「三山時代」と呼ばれる。  
相方積み：石材を加工し、自然にかみ合うようにした積み方。  
布積み：各段の高さを水平にそろえて積み、横目地が一直線になる積み方。  
亀甲積みとも。

##### ▶ 勝連城跡

沖縄で現存する最古のグスク跡。15世紀半ばには、阿麻和利の居城であった。勝連城では自然の丘に高低差の異なる曲輪が配され、南側に良港を備えていた。城内にはコバノツカサ神などを祀る拝所があり、L字状に石が置かれたトゥヌムトゥと呼ばれる祭祀場所がある。



##### ▶ 中城城跡

標高約170mの高台に残るグスク跡。かつては護佐丸の居城で、阿麻和利の居城であった勝連城とは中城湾を挟む対岸の地に立っている。6つの曲輪で構成される。

##### ▶ 玉陵

1501年に第二尚氏王統第3代王、尚真によって築かれた陵墓。沖縄地方の伝統的な墓形態の1つであるはふほか<sup>\*</sup>破風墓<sup>\*</sup>。墓堂には東室、中室、西室が連なり、王族の遺体はまず中室に安置され、数年を経た後に王、王妃、王子は東室、その他の王族は西室に納められた。

##### ▶ 園比屋武御嶽石門

首里城にある森で、かつては王族の聖域であった園比屋武御嶽に通じる石門。1519年、尚真王の時代に造られたもの。木造建築の様式に則った石造建築という特色を持つ。園比屋武御嶽であった森は、第二次世界大戦の沖縄戦の際に焼失したが、残された石門には今多くの人が参拝に訪れる。



##### ▶ 識名園

1799年に造営された王家の別邸。沖縄戦で破壊された後、1975年から1996年にかけて実施された修復により、往時の姿を取り戻した。全体の意匠や構成は琉球独自のもの。

##### ▶ 斎場御嶽

琉球王国における祭祀をつかさどった「神女」の最高位である「聞得大君」による「御新下り」の儀式などが行われていた聖地。かつては中央集権的な王權を信仰面、精神面から支える国家祭祀の場として重要な役割を果たしていた。御嶽内には「三庫理」「大庫理」「寄満」などの拝所がある。

破風墓：人家をかたどった石造りの墓堂。



海と山が非常に近い地形をした知床半島

**北海道**

**知床**  
Shiretoko  
自然遺産

登録年 2005年 登録基準 (ix)(x)

### 登録基準の具体的内容

#### ●登録基準(ix) :

季節海水による活発な生物活動が見られる知床は、海と陸と川の相互作用のある生態系の顕著な見本である。

#### ●登録基準(x) :

オホーツク海に突き出すように延びた半島で、中央部に知床連山がそびえる知床では、東西で気温、降雨量に大きな違いが見られる。その多彩な自然環境は、生物多様性の保全にとって、最も重要な生育・生息域を内包している。

### 遺産価値総論

知床は、オホーツク海の南端に面する北海道北東端に位置する、長さ約70km、基部の幅約25kmの細長い半島である。この近海は地球上で最も低い緯度で海水が結氷する「季節海水域」に位置しており、季節海水(流氷)は、周辺の海域に豊かな海洋生物を育む大きな要因となっている。また、暖流の宗谷海流と寒流の東樺太海流の

境界線に位置することも、知床の近海に多種多様な魚類や海藻類が生育する大きな理由となっている。そこから引き起こされる海、陸、川に及ぶ独特の食物連鎖は、地球上のほかの地域では見られない、極めて稀な例とされている。

一方、陸上には中央部に連なる知床連山をはじめ、湖沼や湿原、河川、硫黄孔原、森林など、変化に富む自然景観が広がり、さまざまな植生や、シマフクロウ、オジロワシなどの希少生物を含む、豊かな動物相を育む土壤となっている。



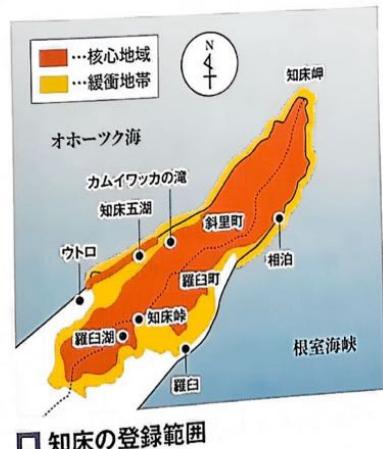
知床連山

### 遺産の概要

#### ①知床の歴史的背景

知床半島に人が住み始めたのは、およそ1万年前頃と考えられている。約1,200年前に大陸方面からオホーツク海沿岸を南下した海洋狩猟民族が知床に到達し、さらに800年前から北海道全域で生活していた別の民族との吸収同化が進んだ。その中で生まれたのがアイヌ民族と考えられている。アイヌ民族はシマフクロウやシャチ、ヒグマを神として崇敬する独自の信仰の下、自然と共生した狩猟採集文化を育んでいたため、130年前まで手つかずの自然が保たれていた。

明治時代、北海道各地で開拓が進んだが、知床半島はその厳しい自然環境のため影響をほとんど受けなかった。その後、知床の内陸部でも本格的な開拓が始まり、1914年、1935年、1949年の3度にわたり入植が試みられたが、いずれも失敗し、1966年までに全ての開拓者が撤退している。1964年、「自然公園法」に基づき国立公園に指定された。1977年には自治体によって開拓跡地を森林に復元することを目的とする「しれとこ100平方メートル運動」がスタートし、日本における最初の「ナショナル・トラスト運動」として大きく発展した。



## ②季節海水域

知床半島と北東の千島列島によって太平洋から隔離されているオホーツク海には、ユーラシア大陸から流れ込む淡水のため、海面付近に塩分濃度の薄い層（厚さは50m程度）がつくられる。また、オホーツク海では周囲を囲むように連なる陸地によって、外海との海流の交換が大幅に制限されているため、こうした塩分濃度の異なる海水の層が保たれやすい。この海水の塩分濃度の差によって、濃度の低い表層の海水のみ冷却されることが、日本の海域の中でも唯一の季節海水域となっている大きな要因と考えられている。

## ③知床の地形と気候

北米プレートに太平洋プレートが潜り込むことで生じた隆起と火山活動によって形成された知床半島の中央部には、最高峰の羅臼岳（1,660m）をはじめ、1,500m級の山々が連なる知床連山が東西を分断するように走っている。そのため、オホーツク海に面する西側のウトロ側と根室海峡に面する東側の羅臼側では、地形や気温、降雨量などの点で大きな差異が見られる。

ウトロ側の海岸線では、100万年前から堆積した火山噴出物が波浪と海水によって浸食された「海食崖」と呼ばれる断崖が続いているが、羅臼側は比較的なだらかな海岸が広がる。また、ウトロ側では、知床連山から吹き下ろす風によって生じるフェーン現象と、オホーツク海唯一の暖流である宗谷海流の影響から気温が高く、降雨量は少ないが、羅臼側では夏場は太平洋から吹き込む湿った南東風が知床連山にぶつかることで雨が多く（年間降水量1,660mm）、海霧が発生するために気温が低い。ウトロ側では観光業が、羅臼側では漁業が主要産業となっている。

### 具体的な遺産価値

#### ①豊かな食物連鎖

知床半島沿岸では、海水の変化とダイナミックな食物連鎖によって、他の地域にはない海から陸へと連なる生態系が見られる。

近海では秋以降に海水の表面が冷却されることで海流の対流が発達する。冬になると海氷下で生じる低温の濃塩水（ブライン）の降下により活発化した対流



によって、海中の下層や海底付近に蓄積されている栄養塩が海面付近まで押し上げられる。そのため、海水の氷解が始まる早春頃になるとアイス・アルジーをはじめとする植物プランクトンが大増殖し、それを餌とするオキアミや小さなエビなどの動物プランクトンが増殖する。さらにそれらを餌とする小魚や貝類が繁殖し、近海にはそれら小動物を捕食するサケやマスなど大型回遊魚やアザラシなどの海生哺乳類、さらにはオオワシ、オジロワシなどが集まる。さらに産卵のため河川を遡上するサケやマスが、森林に生息するキタキツネやヒグマ、シマフクロウの餌となる。

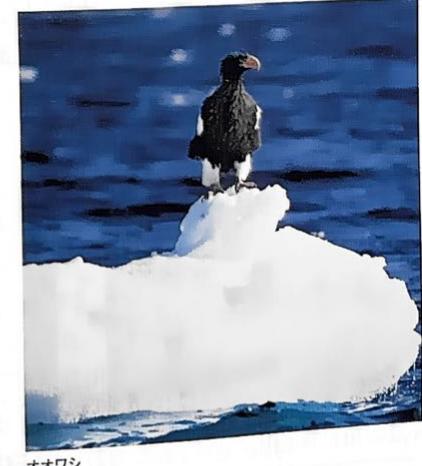
このように、季節海水がもたらす栄養分の循環によって生じる**植物プランクトン大量発生に端を発する食物連鎖**は、海洋生態系と陸上生態系が相互に関係し合い、海、森、川の連続する生態系を生み出している。

#### ②針広混交林と植物の垂直分布

知床半島の低標高地では、ミズナラやシナノキなどからなる冷温帶性落葉広葉樹林、トドマツ、エゾマツからなる亜寒帶性常緑針葉樹林、さらにこれらが混成した針広混交林がモザイク状に分布している。海岸線から山頂にかけては、標高に応じて温帶性から寒帶性までのさまざまな植生が見られる「植物の垂直分布」が特徴。海岸線には、ハマナスやイワベンケイなどの温帶植物が群生し、標高が上がるとミズナラなどの冷温帶性、トドマツなどの亜寒帶性、そして針広混交林などが広がる。さらに高標高の地域では、ダケカンバなどの亜高山帯が続き、森林限界である標高1,100mを超えると、ハイマツの低木林帯も見られる。

#### ③多様な動物

知床近海は、季節海水域にも関わらず、多彩な魚類、海藻類が生育している。魚類では、オヒョウやオオカミウオのような北方系に混じって、マンボウやハリセンボンなどの南方系も見られる。知床半島では海水・淡水合わせて約255種の魚類が確認されているが、淡水魚の7割は川から海に回遊する回遊魚。その他陸生哺乳類35種、トド、ミンククジラなどの海生哺乳類28種、天然記念物のシマフクロウ、オジロワシなどの鳥類264種の生息が確認されている。天然記念物のオオワシの貴重な越冬地もある。





青森県・秋田県



## 白神山地

Shirakami-Sanchi

登録年 1993年 登録基準 (ix)



### 登録基準の具体的な内容

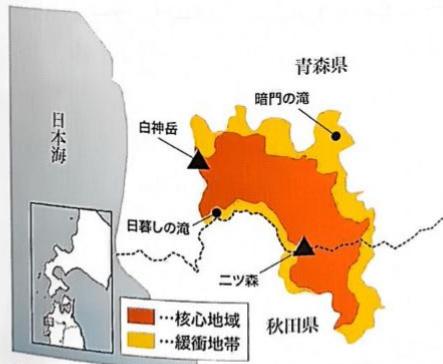
#### ●登録基準(ix)：

日本固有種であるブナがほぼ純林をなし、原始性の高い状態で分布している、他に例を見ない地域。同じようにブナの純林が残っているのは、世界ではヨーロッパだけであるが、日本のブナ林はヨーロッパの5~6倍の植物相の多様性\*を示している。ブナ林の生態的に進行中のプロセスを示す地として価値がある。

### 遺産価値総論

白神山地は、青森県南西部と秋田県北西部にまたがる標高100mから1,243mに及ぶ山岳地帯の総称である。

植物相の多様性：白神山地のブナ林では、500種以上の植物が確認されている。



#### □ 白神山地の遺産エリア

る。総面積1,300km<sup>2</sup>のうち、世界遺産登録範囲は169.71km<sup>2</sup>である。そのうち、大部分を占めているのが、人の手がほとんど入っていない、原生的な姿をそのまま残したブナ林である。日本では照葉樹林と並ぶ代表的な

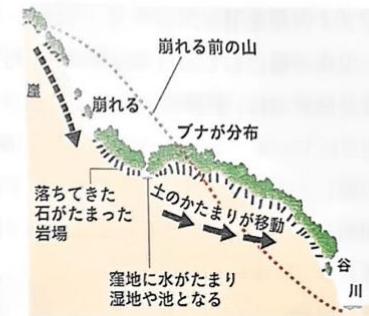
極相林\*であるブナ林だが、多くの地域では用材や薪炭材としての伐採が進んだために、現在、その多くが人工林や二次林となっており、天然林はほとんど残されていない。しかし、白神山地では集落から遠く離れていたことや、地形が急峻だったなどのさまざまな条件が重なり、長い歴史を通じてほとんど伐採が行われることはなかった。また、世界遺産に登録された地域では、現在も歩道や林道などは一切整備されておらず、太古からの森林がほぼそのままの姿で維持されている。

白神山地のブナ林は、多種多様な植物や生物が生息することから、「動植物のサンクチュアリ(聖域)」とも呼ばれる。

#### ①白神山地の地層と地形

地質は主として第三紀層で一部に古生層や花こう岩が露出している。壯年期形を示す地形は、深い谷が密に入り組んでおり、30度以上の急傾斜地が半分以上を占めている。

現在の白神山地が広がる地域は、約258万年前(新生代第四紀更新世)まで一部が海中に沈み込んでいた。その後、年間1.3mmという日本列島の中でも極めて速いペースでの土地の隆起が始まり、それは今日まで続いている。隆起した地層の上層部は、海底だった時代に堆積した「堆積岩」で覆われているため、崩れやすいという特徴がある。さらに、この地域は日本でも有数の豪雪地帯にあたり、崩れやすい堆積層に大量の水分が染みこむことで、頻繁に地すべりが生じる。繰り返し起こるこうした地すべりは、数多くの川や谷を形成するとともに、最終的には山地の崩落を引き起こし、複雑な地形を形成した。



#### □ 地すべりがもたらす植生



地すべり後にも生育し始めるブナ

極相林：植物群落としての成長が進み、全体としての植物の種類や構造が大きく変化しなくなった森林。

## ②ブナの原生林

現在の種としての日本のブナは、約100万年前に誕生したとされており、日本の東北地方では、更新世の温暖期に白神山地を含むブナが優先する林が見られたと推定されている。最終氷期前の4万5,000～3万3,000年前には、日本各地にブナが出現したが、最終氷期に入るとツガやマツが増加し、さらに最寒冷期の2万1,000年前から1万8,000年前頃には著しく減少した。しかし、この時期にも日本のブナはおもに日本の南部地域に退避していたことが確認されている。

最終氷期が終わった1万2,000年前頃には、氷期には朝鮮半島と陸続きとなっていたために止まっていた暖流が再び流入したことで、湿潤化した日本海側を中心に、ブナ林は急速に拡大した。白神山地はこの日本海側のブナ林の北限に位置しており、約8,000年前には現在の分布域を回復していた。

### 遺産の概要

#### ①世界有数のブナ原生林

ブナ属の森林は、日本のか、ヨーロッパ、北アメリカ、中国、コーカサス山脈、台湾などにも分布している。まとまったブナの純林は、日本のかにはヨーロッパにも見られるが、これらの地域では長らく薪炭の採集や放牧が行われてきたため、その植生は極めて単純である。

日本のブナの分布地域は、最終氷期の最寒冷期でも氷河に覆われなかつたことに加え、南部の地域に広く残されていたことから氷期後の回復も早く、約1万2,000年前から8,000年前には現在の分布域に達していたと考えられている。一方、ヨー



ニホンカモシカ

ロッパのブナ林は、最終氷期の氷河の発達にともない、大半の地域がツンドラ地帯となったことから、ブナは大幅に減少し、現在の分布域に達したのはおよそ2,000年前頃と考えられている。こうした歴史の違いからも、日本のブナ林には、ヨーロッパと比較して5～6倍の多様な植生が見られる。

#### ②白神山地の植物相

白神山地のブナ林には、ブナの他にも豊かな植物相が生育しており、現在、秋田側で412種、青森側で506種の植物種が確認されている。これらの中には、アオモリマンテマ（固有種）をはじめ、ツガルミセバヤ（準固有種）、ミツモリミミナグサ（準固有種）などの希少な植物も含まれている。こうした希少種の多くは、かつてはアジア大陸から北海道、本州にかけて幅広く分布していたが、何らかの事情で白神山地を含む東北地方や北海道の一部にのみ残され、それぞれが独自の進化を遂げたと考えられている。準固有種のオガタチイチゴツナギは、現在も進化の途上にあるとされ、植物進化のプロセスを解明する上でも貴重な種である。

この他にも、トガクシショウマ、シラネアオイなどの日本海側に分布する植物や、リシリソノブ、ハイマツなどの高山植物など、多彩な植生を見ることができる。過去の氷期に氷河に覆われなかつたために種の保存や移動、発達が進んだ地帯である「<sup>ヒトカ</sup>日華植物区系\*」に属する植物が大部分を占めており、世界的にも特徴的な植物群とされている。

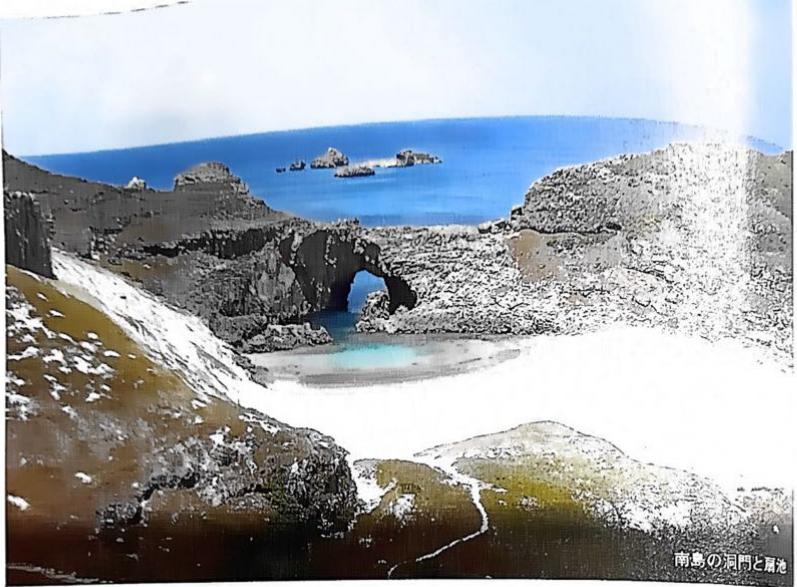
#### ③白神山地の動物相

白神山地のブナ原生林では、豊かな植生を背景に、大型哺乳類、鳥類、昆虫などが数多く生息している。中型哺乳類では、東北地方の哺乳類のうち多雪地帯では生息できないニホンジカやイノシシ以外はすべて生息しているとされ、これまでに特別天然記念物であるニホンカモシカをはじめ、ニホンザル、ツキノワグマ、ホンドリス、トウホクウサギ、ヤマネ、オコジョ、モモンガなどの14種が確認されている。また、鳥類84種が確認されており、本州を中心とする天然記念物のクマゲラや、同じく天然記念物で全国的に絶滅が危惧されているイヌワシなども含まれる。そのほかにも爬虫類7種、両生類9種、昆虫2,212種の生息が確認されている。



クマゲラ

日華植物区系：地球上の植物分布を37区分に分けたものの1つで、日本列島の大部分や、中国からヒマラヤにかけての地域などが含まれる。



東京都

## 小笠原諸島

Ogasawara Islands

登録年 2011年 登録基準 (ix)

### 登録基準の具体的内容

#### ●登録基準(ix) :

海洋島である小笠原諸島では、長期間隔絶した環境での進化や適応放散\*など、さまざまな進化様式における独特の種分化が進んだため、生物や植物は極めて高い固有種率を示している。また、化石種と現生種との比較から進化系列や種の多様性の歴史的変遷を追うことができる。

### 遺産価値総論

小笠原諸島は、日本列島からおよそ1,000km離れた海上に位置する、大陸と一度も陸続きになったことがない海洋島である。世界遺産には、**父島列島**、**母島列島**の3列島からなる小笠原群島を中心に、火山列島である**北硫黄島**、**南硫黄島**、さらに小笠原群島の西に位置する孤立島である**西之島**などを含む30余りの島々の陸域\*と、父島属島の南島周辺の一部海域を含む総面積79.39km<sup>2</sup>が登録されている。また、バッファー・ゾーンの代わりに、東京湾まで続く「**世界遺産管理アリア**」

適応放散：起源を同一にする生物群が、種々の異なる環境に適応し、生理的または形態的に分化すること。

陸域：父島・母島の集落

(World Heritage Management Area)」を設定している。

世界遺産に登録された海洋島には、『ガラパゴス諸島』『ハワイ火山国立公園』などがあるが、これらが海底のマグマの吹き出し口(ホットスポット)からの噴火によって誕生した「火山島」であるのに対し、小笠原諸島に含まれる小笠原群島は、地殻のプレートが沈み込むことで形成される「**海洋性島弧**」に分類されている。

小笠原諸島のそれぞれの島では、隔絶された環境のもとでの種分化や適応放散の結果生み出された独自の生態系が育まれている。そのため、とくに陸産貝類や維管束植物\*は、日本本土や琉球諸島などの他の地域と比較しても、例外的に高い固有種率を示している。小笠原諸島では、こうした種の分化が現在も進行しており、その過程を知ることができる点も貴重である。

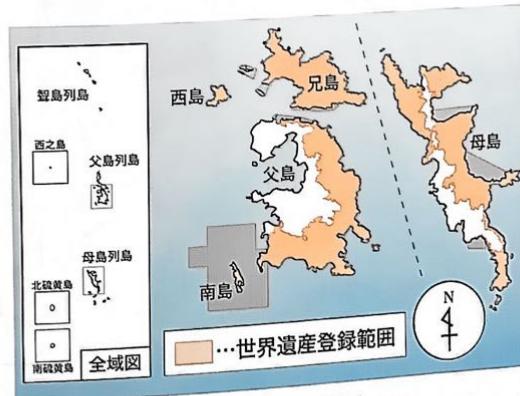
### 歴史

小笠原諸島は、安土桃山時代の武士で、南洋探検を行った小笠原貞頼によって1593年に発見されたと伝えられている。1675年には江戸幕府が調査のために派遣した船が、父島と母島に「此島大日本之内也」という日本領であることを宣言する碑を設置して帰還した。その後も長らく無人のままだったが、1800年代になると欧米の捕鯨船が立ち寄るようになり、1830年には5人の白人と25人のハワイ人が初の入植者として移住を果たした。小笠原諸島の英語名「ボニン・アイランズ(Bonin-Islands)」は、日本語の「無人島」を語源にするとされる。1876年に小笠原諸島は国際的に日本の領土として認められた。

### 遺産の概要

#### ①独自の進化を遂げた生態系

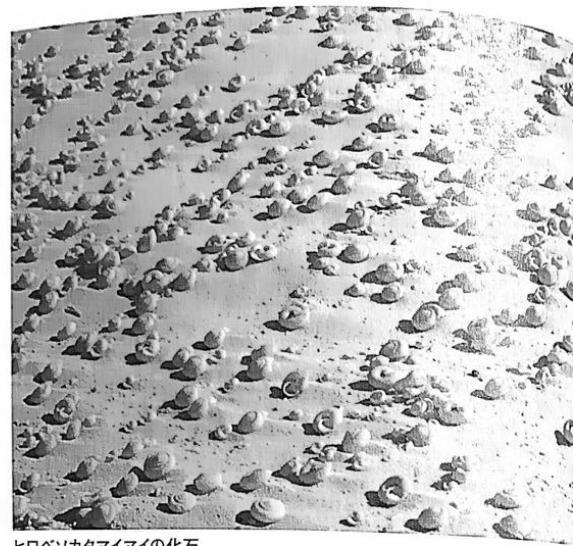
小笠原諸島のような大陸などの陸地と一度もつながったことのない海洋島に生息する陸生生物は、その先祖の種が海をわり、低い確率の偶然によつてそれぞれの地域に定着したものである。そのため、ある特定の種が全く分布せず、逆に限られた種の



□ 小笠原諸島の世界遺産登録範囲

\*維管束植物：植物全体に水などの養分を送る管である「維管束」を持つ植物。シダ植物以上に見られる。

比率が高いなど、生物集団が極端に偏るという特徴が見られる。小笠原諸島の陸生生物は、移動能力が高い鳥類をのぞくと、在来の爬虫類はオガサワラトカゲ、ミナミトリシマヤモリの2種のみで、両生類にいたっては皆無である。確認されている在来の哺乳類が、飛行能力を持つオガサワラオオコウモリ1種のみで



ヒロボエカタマイマイの化石

あることにも、海洋島における生態系の特徴が見られる。

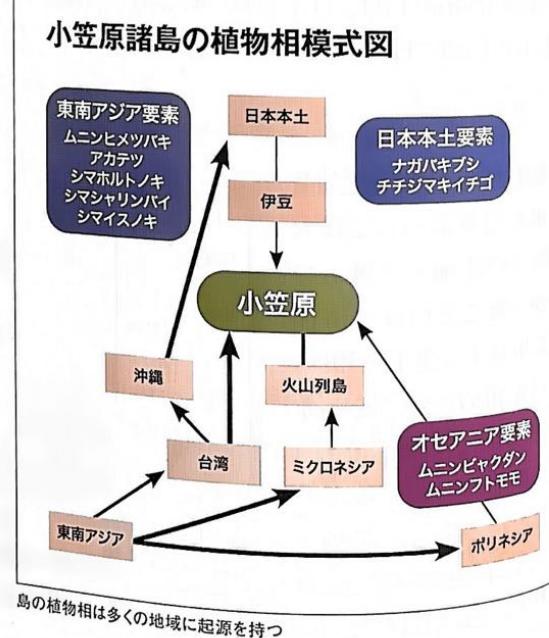
一方、固有種や固有亜種が極めて多く、自然分布する昆虫のうちの約25%、陸産貝類の94%が固有種である。特に固有属の**カタマイマイ属**は種数が多く、樹上性や地上性などの生活環境の違いによる同所の適応放散や、列島間における適応放散を観察することができる。

## ②小笠原の植生

小笠原諸島の植物相は、固有種が占める割合が高い。とくに維管束植物の固有種率は極めて高く、確認されている在来種441種のうち、161種が固有種である。一方、日本本土などでは広く見られるブナやカシ、シイなどはまったく存在していない。

## ③固有種と絶滅危惧種

小笠原諸島の近海では、ザトウクジラやマッコウクジラなどをはじめとする



クジラ類23種\*の生息が確認されており、全世界に分布する海生のクジラ種のおよそ3割に達する。さらにザトウクジラとマッコウクジラに関しては、近海での繁殖も確認されている。小笠原群島の沿岸海域には、周年でミナミハンドウイルカやハシナガイルカが出現するが、少なくともミナミハ

ンドウイルカについては他海域との交流が限定されており、小笠原群島に定住していると考えられている。

日本本土から約1,000kmも離れた海上にある小笠原諸島は、飛行能力のある鳥類も容易に到達できない地域であるため、定着している種は極めて限られている。現在までに小笠原諸島で確認されている鳥類は213種に及び、そこには絶滅危惧種または準絶滅危惧種も含まれている。陸鳥では固有種1種(メグロ)、固有亜種7種(オガサワラノスリ、オガサワラヒヨドリほか)を含む8種が確認されている。

こうした固有種を守る小笠原諸島の管理計画は、「小笠原諸島世界自然遺産地域科学委員会」が中心となって策定された。基本方針として「①優れた自然環境の保全」、「②外来種による影響の排除・回避」、「③人の暮らしと自然の調和」、「④順応的な保全・管理計画の実施」などが挙げられる。外来種の問題では、ノヤギの一部\*やノブタの根絶は達成されているが、グリーンアノールの駆除などの課題も多く、新たな外来種の侵入・拡散の防止が求められている。

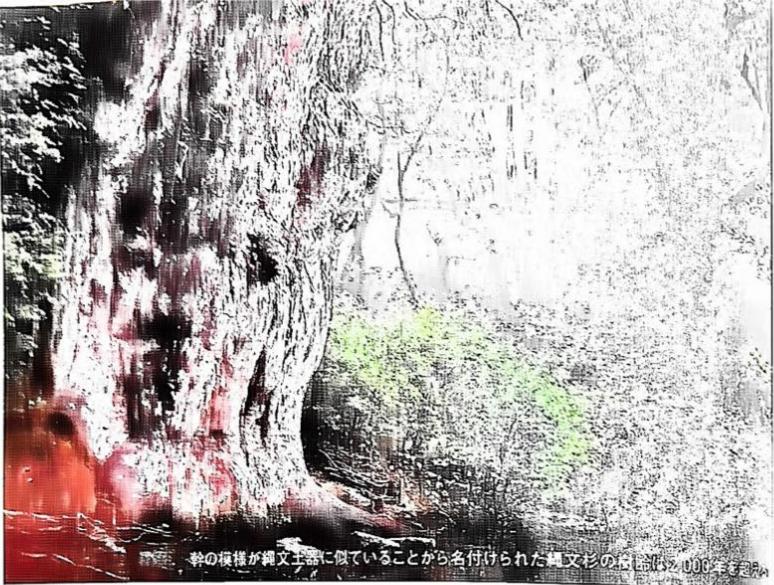


ミナミハンドウイルカ



グリーンアノール

クジラ類23種: 23種のうちイワシクジラ、シロナガスクジラ、ナガスクジラ、セミクジラ、マッコウクジラは絶滅危惧種にも指定されている希少種。ノヤギの一部: 父島を除く南島、東島、聟島列島、西島、兄島、弟島などで根絶された。



幹の模様が縄文土器に似ていることから名付けられた縄文杉の木齢は2,000年超

**鹿児島県**

# 屋久島

Yakushima

自然遺産

登録年 1993年 登録基準 (vii)(ix)

## 登録基準の具体的内容

### ●登録基準(vii) :

樹齢数千年を超えるスギの大木が、梢部分を風などで欠いた傘型となっており、そした独特な樹形のスギが林立している様子は、自然が生み出す類まれな景観である。

### ●登録基準(ix) :

屋久島では、高温かつ湿潤な気候のもと、日本固有種のスギが他の地域とは異なる形態で分布している。日本ではブナ、ナラなどの落葉広葉樹林が大部分を占める中、過去の寒冷期にこれら落葉広葉樹が南下しなかつたために、屋久島には針葉樹林としてのスギが現存している（**遺存固有**）。また、亜熱帯から亜高山帯までの顕著な植生の垂直分布が見られる他、種の分布が森林の発達や多雨による保温効果などにより拡散的に分布している点も評価された。

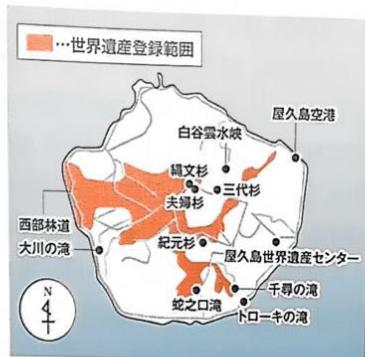
## 遺産価値総論

九州最南端から約60kmの海上に位置する『屋久島』は、九州最高峰である宮之浦岳(1,936m)をはじめとする1,800m級の高山と、その周囲を取り巻く1,000m級の山々が連なる山岳島である。総面積は、東京23区(621.98km<sup>2</sup>)と比較しても一回り小さい504.88km<sup>2</sup>ながら、海岸線から山岳地帯まで急激に標高が変わる島内では、亜熱帯から暖帶、さらには温帶までのさまざまな気候帯が広がっている。そのため、島内には亜熱帯植物から、北海道などに分布する亜寒帯植物までのさまざまな植物が垂直に分布しており、地球上でも珍しい森林景観を形成している。

豊富な植生のうち、とくに象徴的なのがスギである。中でも樹齢1,000年を超えるものは「屋久杉」と呼ばれ、1,000年未満のものは「小杉」と呼ばれる。屋久杉は日本固有種のスギが、屋久島の特殊な環境と気候の下で数千年にわたり生育をつづけたもので、大きいものになるとその直径は3～5mにも達する。屋久杉は島内の標高600mから1,800m地点付近まで幅広く分布しており、現在2,000本以上の生育が確認されている。日本の平均的なスギ原生林と比較してもはるかに広範囲にわたって老齢の巨木が分布する森林は、生態的にも形態的にも貴重である。

岩盤の大部分が花こう岩である屋久島は、九州山系が大隅半島の先端で地殻変動によって海中に陥没し、その後に山稜部が再び隆起して形成されたと考えられている。新生代第四紀更新世の氷期には、海面が80～140m下降したことから九州と陸続きとなり、屋久島には九州に生息していたニホンザルやニホンジカなどの動物が渡った。しかし、間氷期を迎えて再び九州から切り離されると、取り残されたこれらの動物は孤立した島内の環境に適応し、「ヤクザル\*」「ヤクシカ\*」といった固有亜種へと変わっていった。また、間氷期には海面の上昇のため、低地に生育していた種は海中に水没して絶滅したが、屋久島では高地に生育域を拡大することができたため、多くの植生が生き残り、固有種として保存された。

①屋久島の歴史的背景  
屋久島に関する最初の記録は、西暦600年代に記された古文書である。その後、中世には海上交通の要衝とされ、中国や東アジア諸国との貿易において重要な役割を果たした。屋久島にそびえる山々は、古くから島人たちの間では靈山とされ、そこに自生する屋久杉は神木と



□屋久島



ヤクザル

ヤクザル：九州以北のホンドザルに比べ、体毛が長く暗灰色を帯びている。四肢が短い。  
ヤクシカ：夏は山頂付近、冬は低地に下りて生息。日本のシカの中でも最も小柄。

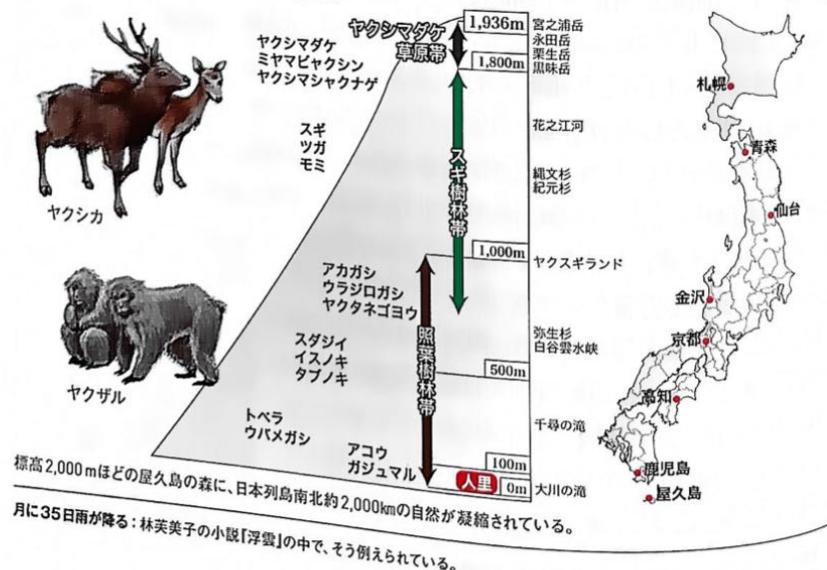
して信仰されていた。そのため屋久杉の伐採は行われていなかったとされる。江戸時代、屋久島を領有していた薩摩藩は屋久杉を貴重な資源と考え、伐採を開始し、およそ200年間にわたり続けられた。明治維新後、屋久島の森林の大部分は国有林となり、1921年には「屋久島国有林經營の大綱」、いわゆる「**屋久島憲法**」が策定された。1924年には、屋久島のスギの原生林は天然記念物に指定されたが、人工造林などにともなう天然の屋久杉の伐採は続いた。しかし、1964年に島内のうち屋久杉が数多く残る地域が九州の霧島と共に国立公園に編入されると、屋久島の天然林に関する保護意識は大きく高まり、1980年代には一切の伐採が禁止された。また1980年には屋久島の天然林はMAB計画の生物圏保存地域に指定され、2005年には島の北西部がラムサール条約登録地となった。さらに2012年には霧島と切り離され「屋久島国立公園」として独立も果たした。

## ②屋久島の地形と気候

屋久島は地質的には琉球列島の北端に位置し、薩南諸島に属している。九州本島の骨格である九州山系が大隅半島の先端で地殻変動のために陥没し、その後元の山稜部が隆起して屋久島や種子島になったと考えられている。

北緯30度に位置する屋久島は、亜熱帯性気候の北限であるとともに、厳寒のシベリア気団の影響を受ける地域の南端に位置している。年間降水量は約4,400mmに達し、降水日数も多い。また平均気温も10°Cを下回る期間はわずかで、高温湿潤である。特に、世界で最も水温の高い海流である「黒潮」の影響から「年に35日雨が降る」とい

□ 垂直分布(環境省HPより作成)



月に35日雨が降る：林芙美子の小説『浮雲』の中で、そう例えられている。

えられるほどの多雨地帯として知られ、大量の雨は花こう岩の岩盤に深い谷を刻み、多くの川や滝を生み出している。

### 具体的な遺産価値

## ①植物の垂直分布

限られた面積の中で海岸地帯から標高1,000m以上の高山地帯まで標高が急激に変化する屋久島では、標高が上がるごとに植生が変化する「植物の垂直分布」が見られる。海岸から標高100m付近まではアコウ、ガジュマル、**メヒルギ\***などの亜熱帶性植物が生育し、標高700～800m付近まではシイ類、カシ類などを中心とした暖温帶常緑広葉樹林が広がる。さらに標高700～1,200m付近までは暖温帶針葉樹林、標高1,200～1,800m付近では冷温帶針葉樹林が見られ、山頂部にはヤクシマダケ、ヤクシマシャクナゲ\*の低木林が広がっている。また、標高1,600m付近には、日本最南端の高層湿原が広がり、ミズゴケやコケスミレなどを見ることができる。一方、日本の他の冷温地帯に広く群生するブナやミズナラは、屋久島では確認されていない。

## ②固有の動物

約1万5,000年前に九州本土から切り離された屋久島の森林には、多くの固有種や亜種を含む動物が生息する。これまでにヤクシカ、ヤクザル、ヤクシマジネズミ、ヤクシマヒメネズミの4種の固有亜種を含む16種の哺乳類、ヤクシマカケス、ヤクシマヤマガラの2種の固有亜種を含む167種の鳥類のほか、爬虫類15種、両生類8種、昆虫類約1,900種の生息が確認されている。

### ③屋久杉

屋久島のスギは、島の中央山岳地帯である「奥岳地域」を中心とする標高600～1,800m付近にかけて多く分布している。屋久島では花こう岩の地盤のため土壤に養分が少なく、スギの生長のスピードが遅い。そのため年輪の幅が狭くなり、硬くなつた幹には、他の地域のスギの6倍以上の樹脂が蓄えられている。こうした樹脂の防腐・防虫効果が、屋久島のスギの長寿の理由と考えられている。放置された木材が内部は腐朽せず、「土埋木」として利用されているのもそのためである。腐りにくい屋久杉では、倒木更新、**切り株更新\***が起こりやすく、これによって屋久島独特の森林景観が生み出されている。



ヤクシカ

**メリギ:** マングローブを構成する植物の1つ。**ヤクシマシャクナゲ:** 屋久島に生育する31種の固有変種の1つ。淡い紅色の花をつける。



鹿児島県・沖縄県

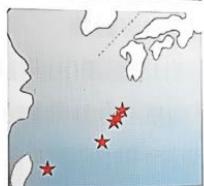


## 奄美大島、徳之島、沖縄島北部 及び西表島

Amami-Oshima Island, Tokunoshima Island, Northern part of Okinawa Island, and Iriomote Island

自然遺産

登録年 2021年 登録基準 (x)



### 登録基準の具体的な内容

#### ●登録基準(x) :

イリオモテヤマネコやアマミノクロウサギ、ヤンバルクイナなど、IUCNのレッドリストの絶滅危惧種95種を含む陸生動植物の生息・生育地であり、その地史を反映した遺存固有種と新固有種の多様な事例が見られる。世界的に生物多様性の生息域内保全にとって極めて重要な自然の生息・生育地を包含した地域となっている。

### 遺産価値総論

日本列島の九州南端から台湾までの海域約1,200kmに点在する琉球列島のうち、中琉球の奄美大島と徳之島、沖縄島北部、南琉球の西表島の4地域の5つのエリアの陸域で構成される。徳之島だけ2つのエリアに分けられている。この一帯は、黒潮と亜熱帯性高気圧の影響を受け、温暖・多湿な亜熱帯性気候であり、おもに常緑広葉樹多雨林に覆われている。

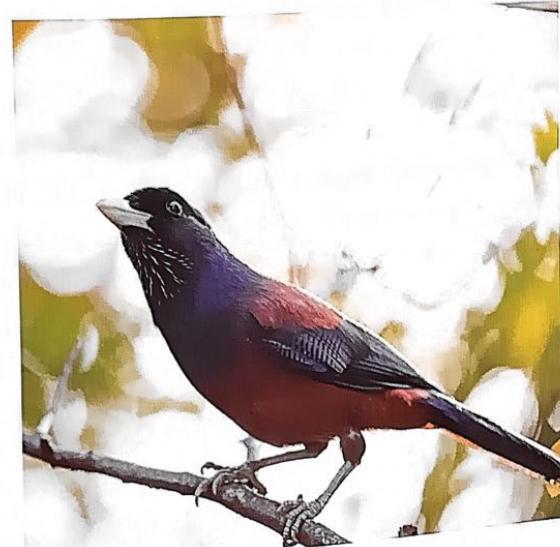
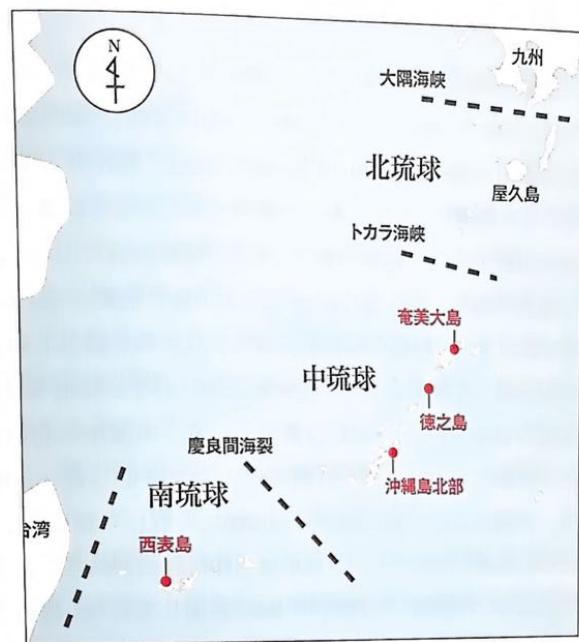
また、世界的な生物多様性のホットスポットの1つで、日本の中でも生物多様性

が突出して高い地域である中琉球と南琉球を代表する地域でもある。登録された地域には、多くの分類群において多くの種が生息する。また、絶滅危惧種や中琉球と南琉球の固有種が多く、それらの種の割合も高い。さまざまな固有種の進化の例が見られ、特に遺存固有種や独特な進化を遂げた種の例が多く見られる。

登録地の生物多様性の特徴はすべて相互に関連しており、中琉球と南琉球が大陸島として形成された一帯の歴史と深く関係している。大陸からの分断と孤立の長い歴史を反映し、陸域生物はさまざまな進化の過程を経て、海峡を容易に越えられない**非飛翔性の陸生脊椎動物群**や植物において固有種が多く見られる独特的な生物相となった。

また中琉球と南琉球では、種分化や固有化のパターンが異なっている。このように多くの固有種や絶滅危惧種を含む独特な陸域生物にとって、世界的にかけがえのない地域である。そして豊かな中琉球及び南琉球の生物多様性の生息域内の保全にとっても、最も重要な自然の生息・生育地を含む地域といえる。

### □ 遺産エリア



## 地形・地質的特徴と気候

琉球列島は、北の端にある大隅諸島が大隅海峡によって九州本土と隔たれ、南西の端にある与那国島が西の海峡によって台湾と隔てられている。トカラ海峡と慶良間海裂の水深は1,000m以上、幅は50km以上あり、琉球列島を地質構造的に分断していると同時に、生物分布上の境界としても当てはまっている。登録された4島は、非火山性の外弧隆起帯の島で、標高が比較的高く山地や丘陵地からなる。

奄美大島は、屋久島の南南西約200kmに位置する。琉球列島の中では沖縄島に次ぐ大きさで、起伏が比較的大きく、谷が入り組んでいる。島の周囲はリアス式海岸が発達して複雑で、海成段丘と低地はわずかに分布するのみである。徳之島は、奄美大島の南西約45kmに位置している。中部から北部が山地で、その周囲の南部から西部にかけては低平な斜面が広く分布しており、海成段丘がよく発達している。沖縄島は徳之島の南西約100kmに位置しており、その沖縄島北部のやんばる3村の山地部が登録された。地形は全体に起伏が大きく、谷が入り組んで複雑である。西表島は、沖縄島の南西約400kmに位置しており、登録地は島の山地部分の大半を占めている。浦内川などの河口は、潮の干満の影響を受け汽水域が発達し、マングローブ林が分布している。

4島は亜熱帯地域に位置するが「亜熱帯海洋性気候」と呼ばれる。近くを流れる暖流の黒潮とモンスーンの影響で年間降水量は2,000mm以上にも達し、亜熱帯域に多雨林が発達する世界的にも珍しい地域となっている。

## 生物学的特徴

### ・植生

自然植生のうち、中心となる山地の森林は、湿潤な亜熱帯に成立した常緑広葉樹林で、上層を占める樹木にはシイ・カシ類、リュウキュウマツ(マツ科)の他、クスノキ科の高木も多く、植生景観は屋久島以北の暖温帶の常緑広葉樹林に似ている。高木に多いスダジイやオキナワウラジロガシ等は、海を越えた種子散布をしにくい種のため、低温で大陸や日本本土と陸続きであった古い時代から残っている植物と考えられる。海岸にはマングローブ樹種をはじめ、アダン(タコノキ科)、モモタマナ(シクンシ科)、モンパノキ(ムラサキ科)、ハスノハギリ(ハスノハギリ科)といった熱帯や亜熱帯の海岸植生を特徴づける樹種が見られる。

登録されたエリアの中で、最も標高の高い奄美大島の湯湾岳(標高694m)や、徳之島の井之川岳(標高645m)の海拔500~600m以上の森林は、日射量が限られた空中

温度が高い雲霧帶<sup>ランムタイ</sup>となっており、アマミテンナンショウやスダジイの群集が見られる。

### ・生物相

琉球列島は、プレートの運動に伴う大陸からの分断による周辺陸域からの隔離と、氷期から間氷期の海面変化による島嶼の陸橋化と細分化という大陸島の形成過程を反映して、特に非飛翔性の脊椎動物で固有種や固有亜種に分化したものが多い。中琉球と南琉球に生息する飛翔力のない陸生脊椎動物種の多くは、ユーラシア大陸の南東部や台湾に進化系統上の姉妹群や幹群\*を有する「亜熱帯系」の生物であると考えられている。

固有種のイリオモテヤマネコやリュウキュウイノシシなど21種の在来の陸生哺乳類が確認されており、日本全土にみられる在来種108種のうちの19%が生息していることになる。また登録地は面積が狭いため、在来の食肉目、偶蹄目、兔目などの中大型哺乳類はそれぞれ1種のみで、靈長目は生息していない。このように、上位捕食者や中大型種が少なく、翼手目や齧歯目などの小型種の占める割合が高いことが、特徴の1つになっている。

奄美大島には、奄美大島と徳之島の固有種であるアマミノクロウサギや、中琉球の固有属で奄美大島の固有種であるアマミトゲネズミ、中琉球の固有属であるケナガネズミ、中・南琉球の固有種であるリュウキュウユビナガコウモリなどが生息する。徳之島には陸生哺乳類12種が生息し、トクシマトゲネズミなど8種が固有種である。沖縄島北部には11種の陸生哺乳類が生息し、固有種のオキナワトゲネズミや固有亜種のオリオオコウモリなどが生息する。西表島では7種の陸生哺乳類が生息し、固有亜種のイリオモテヤマネコが生息するため「ヤマネコが生息する世界最小の島」とされる。

日本産鳥類の62%を占める22目71科394種の鳥類が記録されている。登録エリアは、九州南端から台湾の間の海域に島嶼が飛び石上に連なっていることもあり、渡り鳥が北半球と南半球を行き来するための安全なルートになっている。また亜熱帯性の気候で冬でも暖かく、昆虫類や両生類などの渡り鳥の餌となる生物が豊富である点も渡り鳥が多い理由の1つと考えられる。日本固有の鳥類としてはルリカケスやアマミヤマシギ、ノグチゲラ、ヤンバルクイナが生息する。

日本の陸棲爬虫類の50%を占める36種、日本の両生類の28%に当たる21種が分布している。昆虫は島ごとに亜種に分化している種も多く、亜種を含む固有種数は2,002種である。登録された4島には、亜種を含む37種が環境省のレッドリストに記載されており、日本の国土面積の0.4%に過ぎない地域に絶滅危惧種の10%が集中している。

幹群：系統樹において着目する系統群に対して、最も近縁な系統群を指す姉妹群において、最古の共通祖先の子孫全て。



ヤンバルクイナ

## 日本の暫定リスト記載物件 (2023年12月時点)

### 古都鎌倉の寺院・神社ほか



鎌倉は、日本に初めて武家政権が誕生した12世紀末から約150年間にわたって政治の中心となった都市。三方を山に囲まれ、南側のみ海に面している鎌倉の地形は天然の要塞であつた。

[ 神奈川県 / 1992年 ]  
そこに鶴岡八幡宮とその正面に延びる若宮大路を中心として、寺社や武家館、切通、港が機能的に配置された。中世の軍事政治都市の特徴と武家文化の街並を今に伝える。

### 彦根城



彦根城は、東国と西国の境を守る要衝の地に井伊氏の拠点として置かれた平山城である。また、250年の安定・平和が続いた江戸時代の統治の特徴である「藩」の様子をよく表す近代城郭

[ 滋賀県 / 1992年 ]  
でもある。石垣や水堀によって周囲から隔離された空間や、城下町や周辺の村から効果的に見えるようにつくられた城の形が、江戸時代の「藩」の特徴を表現している。

### 飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群



飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群は、694年に遷都され、平城京に移るまで日本の宮都であった藤原宮跡や本格的な壁画古墳である高松塚古墳、石舞台古墳などで構成される。中国大

[ 奈良県 / 2007年 ]  
陸や朝鮮半島の影響が色濃く残る数々の文化財は、東アジア諸国と日本の交流の形跡を示す。また遺産の構成物件には大和三山など、日本の歴史的風土を形成する文化的景観も含まれる。

### 佐渡島の金山



江戸時代を通して徳川幕府を支えた佐渡島の鉱山は、海禁体制の下で戦略的な鉱山運営を行い、海外との技術交流が限られるなか、鉱山の特性に合わせ伝統的な手工業での生産技術が発

[ 新潟県 / 2010年 ]  
展した。17世紀になると、人口4~5万人の国内最大の鉱山街が形成された。金生産社会の人々の営みが伝わる「西三川砂金山」と「相川鶴子金銀山」の2つの構成資産からなる。

### 平泉一仏国土(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群

奥州藤原氏の居館で政府でもある平泉館の跡と考えられている「柳之御所遺跡」の追加登録を目指している。平泉館は「吾妻鏡」に記録が

残る。

登録範囲の変更（拡大）の際は、再度暫定リストに記載し再推薦する必要がある。

## 日本の世界遺産総論

登録基準から見る  
日本の世界遺産

2023年12月現在、25件（文化遺産20件、自然遺産5件）登録されている日本の世界遺産を見てみると、日本の文化の特徴がよくあらわれている。

文化遺産では、20件のうち『広島平和記念碑（原爆ドーム）』等を除く17件

は、木造建造物が含まれており、木造建造物が日本文化の特徴であることの証しである。また自然遺産では、5件全て、森林とそれに関係する生態系が遺産価値の中心をなしており、日本の自然環境の特徴は「森林」であることがわかる。

| 登録名/登録基準                      | (i) | (ii) | (iii) | (iv) | (v) | (vi) | (vii) | (viii) | (ix) | (x) |
|-------------------------------|-----|------|-------|------|-----|------|-------|--------|------|-----|
| 法隆寺地域の仏教建造物群                  | ★   | ★    |       | ★    |     | ★    |       |        |      |     |
| 姫路城                           |     | ★    |       |      | ★   |      |       |        |      |     |
| 古都京都の文化財                      |     |      | ★     |      | ★   |      |       |        |      |     |
| 白川郷・五箇山の合掌造り集落                |     |      |       | ★    |     | ★    |       |        |      |     |
| 嚴島神社                          | ★   | ★    |       | ★    |     | ★    |       |        |      |     |
| 広島平和記念碑（原爆ドーム）                |     |      |       |      |     |      | ★     |        |      |     |
| 古都奈良の文化財                      |     | ★    | ★     | ★    | ★   | ★    |       |        |      |     |
| 日光の社寺                         | ★   |      |       | ★    |     | ★    |       |        |      |     |
| 琉球王国のグスク及び関連遺産群               |     | ★    | ★     |      |     |      | ★     |        |      |     |
| 紀伊山地の霊場と参道                    |     | ★    | ★     | ★    |     |      |       | ★      |      |     |
| 石見銀山遺跡とその文化的景観                | ★   | ★    |       |      | ★   |      |       |        |      |     |
| 平泉一仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び関連する考古遺跡群 |     | ★    |       |      |     |      | ★     |        |      |     |
| 富士山-信仰の対象と芸術の源泉               |     |      | ★     |      |     |      | ★     |        |      |     |
| 富岡製糸場と絹産業遺産群                  | ★   |      | ★     |      |     |      |       |        |      |     |
| 明治日本の産業革命遺産                   | ★   |      | ★     |      |     |      |       |        |      |     |
| ル・コルビュジエの建築作品：近代建築運動への顕著な貢献   | ★   | ★    |       |      |     |      |       | ★      |      |     |
| 「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群            |     | ★    | ★     |      |     |      |       |        |      |     |
| 長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産           |     |      | ★     |      |     |      |       |        |      |     |
| 百舌鳥・古市古墳群                     |     | ★    | ★     |      |     |      |       |        |      |     |
| 北海道・北東北の縄文遺跡群                 |     | ★    |       | ★    |     |      |       |        |      |     |
| 屋久島                           |     |      |       |      |     |      | ★     |        | ★    |     |
| 白神山地                          |     |      |       |      |     |      |       |        | ★    |     |
| 知床                            |     |      |       |      |     |      |       |        | ★    | ★   |
| 小笠原諸島                         |     |      |       |      |     |      |       |        |      | ★   |
| 奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島           |     |      |       |      |     |      |       |        |      | ★   |

（遺産は文化遺産と自然遺産、それぞれ登録年順）